
Rewrite ～if～

ジャックオーランタンのスミス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e w r i t e \ i f \

【Nコード】

N 8 1 4 8 U

【作者名】

ジャックオーランタンのスミス

【あらすじ】

R e w r i t eの真ルートをやって「こんな終わり方があっても良いんじゃない?」と思って書きます。真ルートを見てない人にはオススメできません。

プロローグ

ここはどこだ？

いや、そんな事を考えなくても分かる。

暗い。とても暗い。

何にも見えない。

けど、俺はこの場所を知っている。

妙な安堵感さえ与えられる。

そして理解する。

ここに戻って来たのだと。

また、新しい記憶が刻まれる。

書き換える事しかできない俺が唯一刻めるのは記憶位なものだ。

ああ、念のために言っておくが「切り刻む」のとはまた違う意味合
いだからな。

ふう、まあ良いとしよう。

そろそろ向こうの世界も書き換えられた頃か。

俺は——救えたのか？

別に救世主になりたいとかの気持ちはない。

ただ、後悔とも違う。挫折とも違う。使命感でもない。

胸に燦^{くすん}るものがあつた。

——それはやり残した事があるから？

誰かが言った。

声の主は分かりきっている。

俺の良く知る人物だ。

——あなたは今まで頑張ってくれた。

けど、結果は散々なもの……。

——分かっていきます。ですが、それがイコール最悪なものばかりではありません。

？良い記憶？とやらを俺はお前に見せた事があったか？

——ありました。一度だけ。

でも手遅れだった。

——それで諦めましたか？

答えは決まっている。

NOだ。

俺はオカ研を作って何がしたかった？

皆とただ騒ぎたかったんだ。

でも一番最良の結果に行き当たるものは何もなかったのを記憶が教えてくれる。

ちはやの時は良かったが、ただ小鳥と朱音がいなかった。

誰かしらがいつも欠落していた。

それはオカ研や吉野、西九条に今宮、江坂さんもだ。

それだけじゃない。

鍵と言われた篝だって同じじゃないか。

——納得いかないならまた書き換えれば良い。

何を書き換えるんだ？

——世界だよ。今度こそ？滅び？なんか起こさせないで。私の願いでもあるのだから。

良いのか？

——あなたが私にした屈辱は忘れていません。

うっ、それを言いますか。

——でも、私があなたに抱いた期待も忘れていません。

声が、遠くから、聞こえて、くる。

——だから、救って下さい。地球を救う『地球救済ハンター』で
しょう？

赤面ものの記憶を掘り出すなよ。

でも悪くない。

良いぜ、やってやる。

永久休業しようとした『地球救済ハンター』を再営業だ。

同時に、俺の、意識は、どこかへ、飛んだ――。

日常？（前書き）

ども挨拶が遅れました。ジャックオーランタンのスミスです。

こういった事はあまり慣れていないので色々と長い目で見てくれると助かります。

誤字脱字などといったものがありませんでしたら教えて下さい。

あとこのサイトの投稿の仕方に慣れていないせいで最初は読みづらい箇所もいくつかあると思いますますがよろしくお願いしよう。

日常？

窓の外が明るい。

今は昼、そしてここは学校の廊下だ。

「よう天王寺」

目の前で我が生涯のライバル吉野と対峙していた。

「何だ？　一緒にトイレにでも行くか？」

「いや、ちげえよ！！」

「じゃあ、何だ？」

「決まってるだろ——」

ニヤリと不適な笑みを零す吉野。

「デュエルだ」

「悪いけどデッキを持って来るのは校則違反だから無いんだ」

「ボケるのも大概にしろよ！！」

「おい、デュエルしろよ」などと言われたらバイクとカードを取り出すのが普通なんだ。

ましてや吉野は「デュエル」などと言い出すのだからそう答えても不思議に思わないはずだ。

しかし、どうにもお気に召さない様子だ。

「2人共仲が良いね」

後ろから声が掛かる。

「オッス小鳥」

幼なじみの『神戸小鳥^{かんべこどり}』。

趣味はガーデニングの一般的な少女だと“思っていた。”

「コタさんや？ あたしの顔をジッと見てどうかしたのかい？」

婆さんみみたいな口調で話して来る。

「今日も可愛らしいな〜と思いやして」

「あらやだ、嬉しいっただらも〜」

いつもの冗談であるから勘違いはしないで欲しい。

ちなみに正史通りに付き合っていない。

「ちっ。興が冷めちまった」

背を向けて歩き出す吉野。

けど目的地って同じだから何とも言えませんがな。

「瑚太朗君、私達も教室に戻ろう」

「そうだな」

教室に足を踏み入れると授業を告げるチャイムが鳴る。

さて、現状について説明しておきたいが――ぶっちゃけ特にない。

だって気が付いた時には病院のベッドの上で篝のオーロラが右腕にあったんだ。

アクセル――書き換え能力に血液操作もあった。
リライター

自覚してると意外と分かるもんだな。

小鳥の事情は聞くタイミングを逃してる。

だから、“あの事件”が起こるまでは制止。

ああ、でも井上を1人で行かせねえ。

俺が何とかできるとも思わないけど頑張ってみるしかねえ。

ガーディアンにガイアの事はきちんと覚えてる。

今の俺が記憶を無くしたフリをしてガーディアンから除籍されてるのも。

いつかは帰る必要があるけど、まだ時じゃない。

時間は短いがゆっくりと積み重ねる必要はある。

それだけ俺のやる事には責任がのしかかるからな。

っていうかこれだけだと俺の置かれた状況を説明してるだけで、肝心な部分を伝えていない。

肝心な部分が何かは多分察しが付いてる人はいるだろう。

俺は今までの記憶の大半を覚えてる。

けれど全員と付き合っていた時の記憶は無い。

非常に惜しい。

朱音やルチア、ちはやがデレている所を見れないのは残念過ぎる。

せっかくなんだから覚えさせてくれてても良いのに――。

コホン、まあ考え事もここらが潮時かな。

小鳥が学校に通えているのは実に喜ばしい。同時に『鍵』である篝の無事も伺える。

時間は放課後。

“まだ”一般人である俺が篝に会いに行くのはちよつとしたリスクが生じる。

それにまだ時期じゃない。

まずは、それよりも会わなくちゃいけない奴がいるからな。

一日の授業の終了を知らせるチャイムがなった――。

でも大丈夫だ。

日常はまだ続いてくれる。

日常？（前書き）

ちよつとキャラの性格が違うかも

同じようには書いたんだけど……

日常？

「ヤバい。遅刻だあああああ！！！」

オッス皆。俺は天王寺瑚太朗。

ちょっと特殊な能力がある事を除けばごく普通の高校2年生さ。

冒頭一文目を見て分かる通りに遅刻寸前で絶賛ダッシュでマラソン中だ。

通り掛かりで白い髪の兄ちゃんに「ラーメンセットはどこで売っている？」と聞かれたが全力で無視。

あと5分で授業が始まる。

そして今居る位置から教室まではおおよそ10分以上は必要とする。

つまりは――

「諦めるが正解だな」

「諦めるなよ！！」と神様から言われた気がするが、世の中はそんなに甘くない。

物理的に不可能なものは不可能なのだ。

俺はその現実を受け止めるだけさ。

まあ『書き換え能力^{リライター}』を使えば可能だけど——今はまだ乱用したくないし、今のままでも常人の域から脱してるから止めておこう。

のんびりと、それこそ時間を掛けて登校した。

1時間目の授業が始まった頃に校門に到着する。

「痛っ」

「ん？」

声のした方へ視線を向ける。

そこには懐かしい奴がいるではないか。

トレードマークの羽のヘアピンをした長い髪の少女。

『鳳^{おむこり}ちはや』だ。

周りを見ても咲夜の奴はいない。

あいつ、ちはやの執事だろうに。

まあ、良い。あいつを放っておく事は俺の精神衛生上悪いからな。

「おーい、どうかしたのか？」

「えっ！？ あっ……いや」

口ごもるちはや。

確か信じがたい事が起こったんだったな。

ちはやも口ごもってる事だし、聞かないで置いてやるか。

どうにも恋人同士だった頃の記憶がチラついて甘くなる。

「今助ける。もう少しだけ待ってろ」

「は、はい」

とは言え、どうしたものか。

梯子は静流に言えば何とかなるだろうけど、授業中のあいつを呼び出すのは気が引ける。

梯子の場所は知らないから無断で借りれないし。

となると――

「自力で助けますか」

かといって、今の俺にはちはやを助けられるだけの力はない。

なら、ほんのちよつとだけ。

スプーン一杯分で十分だ。

たったそれだけの命を削って常人を超えられる。

力は躍動し、力が書き換えられるのを身体で感じる。

ちはやのいるてっぺんまでよじ登る。

「大丈夫か？」

「何とか」

とは言え、足の踏み場もない。

ならば一つ下の枝に降り立つ。

むろん折れないように注意を払いながら。

「腕、伸ばせるか？」

「は、はい——」

結構従順だなくと場違いな事を思いながら、ちはやは身体を下の方へ向けて手を伸ばしてくる。

俺はそれを掴むと、ゆっくりとちはやをこちらへ引っ張る。

打ち合わせもしてないのに黙って従ってくれるのにちょっと嬉しさがあつたりなかったり。

「さて、行くぞ」

「え？」

身体が半分ほど降りてきたところで一気にこちらに引っ張ってお姫様抱っこをする。

そこでミシミシと枝が折れかけているのに気付き、即座に飛び降りる。

強化しといて良かった。

してなきゃ足が痺れて悶絶してた。

「怪我とかしてないか？」

「おかげさまで」

「そうか。それは良かった」

本当に良かった。

思わず笑みを零す。

「――／／／／」

ちはやの顔がどこことなく赤くなった気がするが……気のせいかな？

「あの、そろそろ降ろしてくれませんか？」

「あ。すまん」

お姫様抱っこしてたんだよな。

そりゃあ恥ずかしくもなる訳だ。

「い、いえ……謝らないで下さい。助けて貰ったんですから」

「気にするなよ。助けたくて助けたんだからさ」

「お礼と名前を教えるのがまだでしたね。私は鳳ちはやって言います。助けてくれてありがとうございます」

「俺は天王寺瑚太朗。瑚太朗で良いぞ」

「じゃあ、私もちはやで良いです。よろしくです瑚太朗」

ちはやはそう言って満面の笑みを向けてくる。

う……うむ、前ははからかってばかりだったから優しく接したらこうなりましたか――。

「ところで見慣れない制服だけど転校生なのか？」

「はい。ちょうどこれを持って職員室に行こうとしていました」

ちはやは転がっているダンボール箱を指差す。

一体何が入ってるか気になるが……聞かないが正しいだろう。

「せっかくだし職員室まで案内してやる。荷物も俺が持つよ」

これくらいなら俺でも持てる。

肩に担ぐようにダンボールを持ち上げると先に歩き出す。

「そ、そんな悪いですよ」

謙虚な事にちはやは申し訳なさそうに言ってくる。

「そう言うなよ。男ってのは可愛い女の子の前だとカッコイイ所を見せたいもんなんだよ」

「か、かわっ——!？」

トマトケチャップを塗られたように赤くなるちはや。

あれ？ 無意識に何か変な事を言っちゃったか？

「じゃ、じゃあお願いしますね」

「ああ」

ちはやとは仲が悪くなることもなかった。

その代わりに遅刻した事を理由に教師陣に絞られたのは言うまでもない。

日常？（前書き）

性格の方とか大丈夫か心配になってきた

日常？

「はあ……何でこんな事になってんだ？」

やあ、皆。いかがお過ごしかな？

俺は絶賛校舎裏の草むしり中だ。

念のため言っておくと、ボランティア精神溢れる爽やかな少年じゃない。

むしろこういった事はサボるタイプなのだが――

「何をブツブツ言っている？ さっさと終わらせるぞ天王寺」

横にいる我がクラスの委員長――此花^{このはな}ルチア――が目を光らせているからだ。

こうなった経緯は別段複雑なものじゃない。

単純に遅刻の罰で校舎裏の草むしりを命じられ、委員長のルチアが監視を申し出たのだ。

自分の素行の悪さは知っているから仕方ないけど。

ルチアと恋人だった事があったのも覚えてはいるが、どんな内容かは霨が掛かったように思い出せない。

何やら忘れてはならない事を忘れてる気がする。

思い出せないものを無理に思い出す必要もないな。

「でも委員長は監視役なんだろう？ 草むしりを手伝わなくても良いのに……」

「そう言うな。手伝わせてくれ」

「それならお言葉に甘えるところかな」

ルチアの好意を無下に断る必要も理由もない。

「何よりルチアと一緒に居れるのは嬉しいからな」

やっぱり恋人だった時の事を思い出すとルチアも愛おしく思え――

「な、ななな何を言い出すんだ！！ 天王寺瑚太朗おおおお
っ！！！」

「ぶべばっ！？」

ルチアの渾身の右ストレートが俺のどてっ腹を殴り付けた。

世紀末的な悲鳴が上がる。

うう……い、痛い。

「な、何をなさるの……ですか？」

「それはこちらのセリフだ!!」

何を訳の分からない事を言い出すんだ？

「きゅ、きゅきゅきゅ急にわた私の事を、ルルルチアと!!」

「あゝ」

今まで委員長としか呼んでいなかったから違和感を感じたのだろう。

ってか、無意識に言っちゃったんだ俺。

「そ、それに私と一緒に居れると――その、嬉しいとか……言い出すし」

最後の方はゴニョゴニョと小さかったが、内容が分かったと本当に愛おしくなってくる。

これから他の奴に会ってもこの感情が出るのかと思うと、プレイボーイだな〜と思うよ。

「そりゃあね。ルチ――委員長は自覚ないかもだけど、俺からすれば十分に『可愛い』の部類に入るんだから」

「私が!？」

ルチアの顔に赤いペンキが塗られていく。

最近もこんなを見た気がするんだが。

「まあ、この話は終わりだ。さっさと済ませよう」

「て……天王寺」

俺を呼んだルチアは何だかよそよそしいというか、モジモジしているのが非常に可愛い。

「その、お前が呼びたいのなら別にルチアでも構わないぞ」

「え？」

それは意外だった。

恋人にもなっていないルチアから了承が出るなどとは。

「な、なんでもない！！ さっさと終わらせるぞ！！」

俺が聞こえていないと勘違いしたのかルチアは草むしりを再開した。

後日、その時言ったように「ルチア」と呼んだら50コンボパンチを喰らった。

理不尽だ……。

日常？（前書き）

瑚太朗の口調がおかしい気がしてきた

日常？

「フンフフン♪」

今の俺はとても上機嫌である。

理由を聞きたいって？

しょうがない教えてしんぜよう。

なんと、今日は昼時の時間帯に10個しか作られないサンマパンを1つ入手したのだ。

ネーミングから怪しさを感じているだろうが実はそうでもないのだ。

これは本当に限定で作られる位に美味しいのだ。

わざわざ昼休みに学校を抜け出して買いに行ったのは正解だった。

至高の美味さを放つサンマパンの存在を教えてくれたのは――

『ピイイイ――ッ!!』

俺の後ろからホイッスルの音が響く。

別に試合終了の時間を伝えてるとかいうのじゃない。

単純にこのホイッスルを鳴らした人物は俺に用があったと見る。

「どうかしたか？ 静流」

振り向けば奴が……じゃない、俺の可愛く頼れる後輩の『中津静流』なかつしずるがいた。

彼女は風紀委員で、風紀を乱す生徒には事あるごとに笛を鳴らす。

俺は当然ながら今日はまだ何もしていない。

静流に注意をされる事はしていないはずだ。

「コタローはズルい」

「何が？」

「サンマパン……」

あゝ、分かりました。

そういえば静流はサンマが好きだったな。

これも静流から教えてもらったものだし。

サンマパンを買いたいのが、風紀委員の自分が校外へ無断で出るのは忍びない。

まあ、後輩ってのもあるが静流には今後何かと協力し合う形になりそうだからな。

「なあ、中庭で飯を食べないか？」

——どうして？

とでも言いたげな仕種で首を傾げた。

「良いから良いから」

今日のお昼は静流とが良からう。

俺は戸惑う静流の背中を押し進める。

「ほらほら、早くレジャーシートを広げて食べるぞ」

時間も結構差し迫っているしな。

チャッチャとシートを広げ、俺達は腰を落ち着かせた。

「コタロー」

静流はいつの間に用意したのやら、魔法瓶を取り出して中身を紙コップに注いで渡してくれた。

「ありがとう。静流は良いお嫁さんになれるな」

——いやいや、そんな事ないぜ兄貴。

手を前に出して左右に振る仕種が可愛いなゝ畜生!!

それを見て勝手ながら静流の心の内を妄想させて貰ったが……。

「そんじゃ、これはお礼だ」

元々そのつもりだったし、構わないんだけどさ。

サンマパンを静流に渡してやる。

「……」

何だか分からずに呆ける静流。

「これはコタローが……」

やっと言葉が出たら、やはり遠慮がちに言ってくる。

「そう言うなよ。静流に食べて欲しいんだからさ」

ポンッ!! と頭を撫でてやる。

例のごとく恋人だった時の記憶を持ち合わせているからか、自然と動いてしまった。

静流はカーツと頬を赤く染める。

照れてるのか？

初奴め。

「美味いか？」

「コタローが買ってきてくれたものだ。美味しくない訳がない」
やべっ、嬉しい事を言ってくれるじゃないのさ。

「でも1人で食べるのは寂しい」

そう言ってサンマパンを半分にちぎる。

「コタローも一緒に食べよう」

「お、おおっ!! ありがとう静流」

こんな嬉しい事があって良いのか？

良いはずだ!!

神様だって俺の頑張りを評価してくれてるんだ!!

まだ動いてないけど。

それから中庭でまったりと過ごし、一緒に昼寝をした。

起きた時には1人で中庭に放置され、放課後になっていたのはお約束だと言えた。

静流よ、せめて起こしてから行ってくれ。

非日常？（前書き）

初戦闘シーン

非日常？

あゝ、超常現象に出くわさない。

いや本当は嫌なんだけど、出くわさないと朱音に会った時に説得力がないというか……

篝産の幽霊騒動は起こらないしさゝ。

「コタローさんや」

「なんだい？ 小鳥さん」

「今日はサイン会があるから先に帰るね」

「サイン会？ 誰の？」

「私の」

「Once More？」

「だから、私のサイン会」

「嘘だ！！」

いや、まあ……本当は知ってるけど。

否定したのは――その場のノリだ。

「嘘じゃないのに」

「いや、信じるのは難しいんだけど――」

「まあ、そうだろうね」

小鳥は腕時計に目をやると「はっ!? もうこんな時間だ!!」と言ってさっさと教室を出て行ってしまった。

「俺も帰るか……」

続いて教室を1人出る。

俺って、本当に友達少ないな。

「はい。それじゃあ、そんな感じで」

携帯での通話を終える。

お金は大事だからバイトはしてますとも。

バイト内容は前回と同じで記者のまね事だ。

「とは言え……すぐに見付かるのか?」

案外歩き回ってれば“あの空間”に入れるかもしれないけど……ギャンブル性が高いだろ。

「とか思っていた時期が俺にも3秒ほどありました」

辺りの変化には俺も敏感になったものだ。

“ここは風祭市に似た風祭市じゃない街だ。”

ガイアの作った風祭市そっくりの空間。

なんだったか呼称があっただけど忘れた。

「それより……」

神経を尖らせる。

俺も非日常には手慣れたものだ。

右腕に意識を集中させる。

今の俺ならオーロラを操る事など造作もない。

変化はすぐに訪れた。

オーロラがワカメのようにウネウネとした“いびつ”な形の剣。

オーロラブレードって名前止めようかな……。

ワカメみたいだからワカメブレードの方が向いてる気がしてきた。

「って、ふざけてる場合じゃねえ」

神経を尖らせる。

こんな事には慣れっこだが、正直言って関わりたくはない。

今の俺なら犬っころごときに負けはしない。

けど、もしも圧倒的大多数で攻められたら？

いや、ないか。

ここにいるのは魔物使いだ。

魔物使いは魔物を使役するのに自らの命を消費する。

そうホイホイと命を安売りみたく使う訳がない。

仮に使ったとしても数はたかが知れている。

でも例外はいつの世でも生まれる。

加島桜やしまこが例外に含まれる。

とにかく隠密に各個撃破が望まれる。

足早に俺は狭い路地裏を駆け抜ける。

この世界から抜け出る為の“穴”がどこかにあるはずだ。

まずはそれを探――

「っ!？」

ちょっと遅かったみたいだ。

俺の前には黒い大型の犬が3匹。

もしも「狼です」と言われても不思議はない。

明らかな敵意をこちらに向けて来る。

平和に解決は……出来そうにないな。

「仕方ない」

腰をグッと低くする。

それを見て1匹が爪で切り付けようと飛び掛かって来る。

そんな直線的な攻撃が通じるかっての。

飛び掛かる犬よりも速く懷に飛び込み――ブレードを心臓部に突き付ける。

音は何もなかった。

音もなく、光の粒子となって犬が消え去る。

それを見ていた2匹は臆して逃げ出そうとしたが、再び飛び掛かる。

一方は噛み付く為に跳び、もう片方は俺の動きを止めようと足に噛み付こうとしてくる。

強化は必要ない。

オーロラもこの長さで十分だ。

無言で横にスライドする。

冷静さを失う事は戦闘では致命的だ。

「終わりだ」

終了のホイッスルを告げてやる。

まずは空中で身動きの取れない1匹にブレードを突き付ける。

胴が半分に別れ、光の粒子となって消える。

間髪入れずに残る1匹に接近。

呆然とした顔を浮かべる犬に縦に一閃。

頭から斬られ、身体が左右に真っ二つに斬った。

「他愛もないな」

腕の悪い魔物使いに使役されたな。

本来なら多少は手こずってもおかしくない。

皮肉にも、これで会長に頼る大義名分ができたな。

とあるキャラのセリフを借りさせて貰う。

今の俺の心境は——やれやれだ。

日常？（前書き）

今回は適当なところで切り上げました

まだ朱音が登場してないゝ

日常？

「天王寺瑚太朗君だよね？」

「え？」

朝早く、学校の廊下を歩いていると声を掛けられた。

なんとなく聞き覚えのある声で、彼女の正体は俺には容易に想像できた。

案の定、そこにはTHE凄腕カメラマン・井上様がいた。

「新聞部の井上って言うんだけど、少し時間良いかな？」

「……………まあ、良いけど」

逡巡したが、仕方がない。

朱音と会う口実になるしな。

その為のアイテム『何か書かれた紙』を取り出した。

「それじゃ質問。天王寺君が裏口入学したって話だけど本当なの？」

「1週間前に裏口から学校に入った記憶はあるぞ」

「そういう裏口じゃないって!!」

「ああ、賄賂を使って入学したかどうかの事か。最初からそう説明してくれよ」

「最初からそう言ってるからね？」

うむ。たまにはこういう冗談混じりのやり取りを井上とするのも面白い。

思い返せば井上とは冗談を言い合う暇はなかったからな。

「真実を言うと、裏口入学をした記憶は一切ない」

「ふーん。シラを切るつもり？」

「そんなつもりは一ミクロンもない。俺は本当に真実しか言っていない。記事にはどうとでも書けばいい。どうせ嘘にならない範囲で書くつもりなんだろう？」

「……」

返す言葉もないようだ。

「けど覚えておけよ？ 人の信用を得るという事は誰かしらを敵に回すのと同じだ。全員が全員賛同してくれる訳じゃない。他人の内容の場合は特にな」

「それくらいの覚悟はジャーナリストとして当然あるわよ」

即座に返された。

でも井上はこの方が一番良い。

「そうか。まあ、ほどほどにな」

「そうするわ」

井上は後ろを振り向きながらスカートのポケットに紙を入れる。

それを確認し、常人には捉えられぬ速度でポケットから紙を抜き取った。

バレずにスリができそうだ。

「まあ、こんなもんか」

教室に向かう。

気付けばHRを告げるチャイムが鳴っていた。

時は経って放課後。

「瑚太郎。その紙はなんなんですか？」

後ろの席に座るちはやが尋ねてくる。

未だに前の学校の制服だ。

ちゃんと用意してやれよ咲夜。

「ああ、ちょっと気になる事があってさ」

「おや？ 瑚太朗君の名前が書いてあるね」

小鳥がこちらに近寄って、紙の内容を見る。

「俺って良い子で有名だからな」

「ここに裏口入学って書いてあるよ？」

おおうふっ！？ 何たるトラップ。

「ち、違うんだ」

「ほれほれ、白状しちまいな。ばっちゃんを悲しませたくなけりやあね」

白雪姫を永遠の眠りに着かせようとする魔女みたいな言い草だ。

「まあ、それは置いておくとして――」

「スルーなんだ？」

「この『学園の魔女』って人に会いに行くの？」 「え？ そうだけど――何で分かったんだ？」

「赤線が引かれてるからじゃないですか？」

ちはやのご指摘通りに『学園の魔女』の下には赤の下線がある。

俺は書いてない。

って事は井上さんか。

「最近心霊現象っぽいのに襲われてるからな。藁にもすがる思いなんだ」

「面白そうだから私も行って良い？」

「なら私も行きます」

小鳥（職業・魔物使い）、ちはや（職業・魔物使い）の2人が瑚太朗（職業・勇者っぽい何か）のパーティーに加わった。

「場所は調べてあるし、行くか」

さて、『学園の魔女^{ボス}』に会いに行きますか。

オカルト研究会の部室前に立つ。

ドアには鍵が掛かっていた。

「……………」

瑚太郎は呪文『秘密の裏技（こじ開ける）』を使った。

するとどうでしょう？

鍵のある部屋も関係ない。

簡単に扉が開いたのです。

「良いんですか？」

ドアの惨状に釘付けになるちはや。

「彼は犠牲になったんだ」

「何の犠牲ですか……」

「瑚太郎君のよまい言に付き合っちゃダメだよ。すぐ調子に乗るから」

「まあ実際何とかするだろ」

朱音なら直せそうだし。

「部屋は広いですね」

ちはやの第一声はそれだった。

お前はここに何度か来てなかったか？

「とりあえず、誰も居なさそうだし手紙だけ置いて帰るか」

内容は至ってシンプル『直接話がしたい』と書いておく。

悪用はしないだろうから連絡先も教えておく。

これでOK。

今日の用事は終わった。

また明日だな。

日常？（前書き）

だあゝ、大分はしよった

日常？

朱音宛の置き手紙を書いた翌朝。

俺はオカ研の部室に来ていた。

「ようやくと来なはったな」

出来損ないの京都民みたいな口調で独り言をしながらアンケート用紙を斜め読みする。

まだ心霊現象が起きてないけど……以前にあったし、あながち間違いないじゃないもんね。

以前までの世界の俺を含めた非日常に当て嵌まる事柄を埋めていく。

最後に行き着いたのは――

「『変えられるとしたら世界と自分どちらを変えますか』――か。やっぱしあるのか」

どれを変えても何かを失ってきた事実を思い出す。

それなら、さ――

「これだろ」

俺はそんな理不尽をしたくない。させたくない、そう願いを込めて。

「今の俺の回答だ」

少年漫画の主人公みたいなノリだな。

誰も居ない教室で言っても寂しさが増すだけだ。

さっさと行こう。

その日の夜に連絡は来た。

『深夜神聖なる部屋で待つ』

「前もこんなメールだったっけ？」

如何せんそういう事はあまり覚えていない。

ただ、言えるのは朱音とのコンタクトには成功の兆しがあるという事か。

そんな訳で深夜、俺は指定された場所へ向かう。

「途中描写書くのめんどくさい」と変な電波を受信し、気付けばオ

カ研の前に立っていた。

「さて、入るか」

この前と違ってドアは開かれていた。

室内は暗く、目が慣れなければ見る事が叶わないとさえ思えた。

けど、その心配はない。

舞台の役者にスポットライトが当てられるのと同じく、突然俺の目の前に現れた人物が青白く光る水晶をテーブルの上に置いて不敵に笑っていた。

不敵に笑っていたとは言うが、相手は黒いフードをしていて顔の下までは伺えない。

黒いフードをした人物は口元を吊り上げ、口を開いた。

「ようこそ迷える子羊よ、デプシーの館へ――」

「あ、暗いんで電気点けますね」

朱音のセリフを遮って入り口付近のスイッチを入れて電気を点ける。

「……………」

スッゴく睨まれています。

いや、まあそうですね？

「すみません。やっぱりまずかったですか？」

「……もういいわ、さっさと本題に行きましょう」

毒を抜かれたようにうなだれる朱音。

「さて、お前のアンケートは読ませてもらったわ」

「どうでした？」

「このアンケートでハッキリしたわ。分かるのは——お前がバカという事よ」

まあ、そうだろうな。

最後の質問には馬鹿じゃね？ と思える事を書いちゃったし。

「『世界と自分を変えられるなら、両方を変える』ですものね。何？ 夢見がちな中学生でもあるまいし」

「まあ、そう思うだろうけどさ」

俺は真剣に答える必要がある。

朱音が道を踏み外さない為にも——。

「俺はどっちか片方を選んで失うのは嫌なんだ。子供の我が儘なのも分かる。だけどさ。なきゃいけないんだ。少なくとも、それが実現可能な位の力はあると自負してる」

「なるほど、ね」

朱音は今の俺の言葉を吟味しているようだった。

「実力があるかは知らないけど、別に構わないわ」

「何が構わないんです？」

「このサークルに入る事よ」

おおっ！？ 何か知らないけど入れたぞ。

「名乗らなければね。私は『千里朱音』せんりあかねよ。よろしく天王寺瑚太朗」

何で俺の名前を——とか思ったけど、そういえば手紙に名前を書いてたな。

「改めて天王寺瑚太朗です。よろしくお願いします会長」

ここに居る以上は懐かしい呼び名が相応しい。

「それじゃ、明日詳しい話を聞いてあげるから帰りなさい」

「もう帰らせるんですかい！！」

「私は忙しいのよ」

とか言いつつもパソコンが起動しているのは——突っ込まないでおきますか。

これから世話になる訳だしな。

「じゃあ……また明日来ます」

仕方ないと割り切って部屋を出た。

サークルには入る事ができたが、学園から出る途中に警備員に見付かって壮絶な鬼ごっこをする羽目になるとはこの時の俺は知らなかった。

日常？（後書き）

ちよつと更新ペース遅いかな？

まあ、のんびりやりますかな

日常？（前書き）

疲れてるせいかな、内容がグダっている

日常？

今朝はなんとなく暑いと感じる気候だ。

とは言え、気温は20ちよつとであるので真夏日みたいな猛暑な訳ではない。

こここのところの気温が低かった反動であろう事は容易に予想ができる。

「瑚太郎さんやないですか。おはようさん」

「おはよう小鳥」

今朝も小鳥と合流して学校へ向かう。

「あれ？ あれって静流ちゃんじゃない？」

小鳥の指差す先には特徴的な金髪ツインテールの静流閣下が歩いていた。

こんな時間に会うとは珍しい事もあるもんだな。

「おーい、静流。おはよう」

「おはようコタロー」

俺が大声で言ってやると素晴らしい笑顔で朝の挨拶をしてくれる。

「おはよう静流ちゃん」

「お……おは、よう——コトリ、先輩」

「小鳥って呼び捨てで平気なのに」

小鳥が話し掛けると頬を赤くして俺の背に隠れようとする静流。

忘れがちだけど人見知りしやすいんだっとな。

これを機にそういった部分もなくなると良いんだが。

「静流がこの時間に登校してるなんて珍しいな」

「バイトで呼ばれて遅くなったんだ」

「バイトって——静流ちゃんが？　こんなに朝早く呼び出されるものなの？」

「今日は特別。普段は呼ばれない」

大方ガーディアン絡みだろうな。

この頃の俺は何にも知らずに日常を過ごしてたし、ちはやや朱音はガイアだって事もあるし、小鳥はドルイドだって事も知らなかったけどな。

バイト⇨ガーディアンなのは間違いあるまい。

「フーキーンもあるのに大変だな」

「問題ない。支障が出ないようにして貰っている」

さすがフーキーン。

しっかりしている。

「そういえばさ、俺サークルに入っただ」

「おや？ その情報は小鳥さんも初耳だね」

「コタローは何のサークルに入っただ？」

「オカルト研究会」

（静寂を伝える擬音の） シーン×2

え？ 何？ 今の俺ってば滑った？

「なんというか——本当に入っただ？」

半分位は話を知ってた小鳥が苦笑気味に聞いてくる。

「サンマ缶研究会かサンマ缶同好会はないのか」

静流はサンマ缶に関する事柄ではないのに不満を抱いたようだ。

いや——まあ、ね。

さすがにサンマ缶に関係したサークルとかはないでしょ。

「コタロー。私は決めたぞ」

「想像はできるが発言を許可する」

「サンマ缶同好会を私は作る！！」

手をグツと握り締めて天高く突き上げる。

そんな海賊の王様を目指す麦わら帽子の男が夢を宣言する言い方をせずとも。

「ちなみに今のは冗談だ」

「冗談なのか……」

静流ならやりかねないと思ったんだが。

「それじゃ瑚太朗君。私はガーデニング研究会を立ち上げるよ」

「お前も自分の好きな事に忠実だな！！」

「冗談だけどね」

間髪入れずに告げられた。

分かってるよ。

立ち上げられる程に知り合い居ないのを。

「何気にひどいと言わなかった？」

「言っていない言っていない」

意外と勘が鋭い。

さすがは幼なじみですな。

「ところでコタロー」

「どうした？ 静流」

「時間」

腕時計を確認する。

うん。HR開始まであと5分。こっから学校まで走って5分。

言える事は1つ。

「走れ！！」

俺達は全速力で駆けた。

途中で小鳥がバテて俺がおぶる事になった。

俺のその日の体力を使い切ったと言って良い。

小鳥に先に行って貰うと、疲労困憊で下駄箱で倒れた。

発見されたのは2限の授業が始まる時だったりする。

日常？（前書き）

名前ミスあったけど修正しました！

日常？

「はあ、こんな時に呼び出しかよ」

昼休み。俺は学園の魔女様に呼び出された。

向かうべくはオカ研の部室。

「居るかな？」

部室の鍵は閉まっていた。

誰もいないのか？

「ん？」

妙だった。

部室に人の気配がする。

朱音なら鍵を閉める必要はないだろう。

まさか——そんな訳はないよな？

“あいつ”はあの世界で——

でも冷静になれば、何でちはやここに居れる？

心臓が早鐘のように鳴っている。

力任せに部室のドアを開けた。

そこに“あいつ”は居た。

本を読む姿が絵になっている。

眼鏡を掛けた美青年。

あの世界で存在が消え去り、一生世界に干渉はできないはずだ。

その、はずなんだ。

なのに――

「何で……ここに？」

「読書の邪魔ですから帰って下さい」

ははっ。俺の第一声に突っ掛かって来るのか――相変わらずだな。

「悪かったな。でも俺は人を待ってるんだ。邪魔にならないようにはするさ」

朱音が使ってるソファ―に座る。

「ふむ。君、名前は？」

「天王寺瑚太郎」

「天王寺与太郎君ですか。噂は兼ねがね」

おいしい!!

一字違いだ。

わざとだろうけど。

「噂ってどんな？ あと瑚太朗な」

「それはですね——」悪かったわね。遅くなったわ」

まるでマンガみたいなタイミングで朱音が現れた。

「お嬢様」

にこりと『鳳咲夜』おおとりさくやが微笑む。

「お嬢様は止めて」

「では朱音さん」

「もうそれで良いわ」

諦めた口調で朱音は言う。

「会長。この人は知り合い何ですか？」

心では朱音って言って、口では会長だから混乱しちまうな。

「まあ――ね」

「ふむ。何やら話があるようですね」

咲夜は窓に近寄ると開けた。

「では、これで失礼します。あと私の名前を覚えていなかったの
で教えてください」

窓に足を掛けて瑚太朗の方は見ずに言う。

「私は咲夜と言います。ではまた」

そう言って咲夜は窓から飛び降りて行った。

何だか態度も軟化してる――って事はないな。

「それじゃ、話を聞かせて貰おうかしら」

あらやだ。咲夜さんの行動に関してはスルーですかい。

まあいいや。

俺は朱音にこの間の無限回廊ならぬ無人街の事を話した。

「なるほどね。お前は白昼夢を見ていたの。これで解決よ」

「はあ……そうですか」

俺の話をこんな無理矢理に科学的に説明してくれる。

初っ端に白昼夢とか言い出されたけど。

「会長はオカ研なのに科学派ですか？」

「ええ。まあね」

とか言いつつも、一番オカルトに近いけどね。

「なら。俺がいろいろと見付けて来ますんで、調査しましょう!!」

「嫌よ」

0, 2秒で即決された。

「でも、まあ可愛い下僕——もとい部員だものね。良いわ、何か見付けて来たら付き合っただげるわ」

「もしそれが本当に超常現象だったら？ どうします？」

「その時は私の胸を揉ませてあげるわ」

この時、瑚太郎に電流走る。

って、ふざけてる場合じゃない。

「本当ですか!？」

「ええ。二言はないわ」

よっし！！

今度こそ会長に胸を揉ませて貰うんだ！！

いかにも不純な理由で俺は会長にオカルトを信じ込ませる依頼を受けた。

前回から成長してねえな俺。

非日常？（前書き）

ふく、完成に手間取った。

ちよい長め

非日常？

「という訳で不思議を探しに行くぞ！！」

「どういう意味ですか？」

「十分な説明を要求する」

放課後。

仲良く教室を出ようとした小鳥とちはやを呼び止めた。

そして先程の昼休みにあった出来事を説明し、不思議探索の協力要請を願ったのだ。

「だから、俺と一緒に風祭に隠された不思議を探そうぜって話だ！！」

「いやいや。そうじゃなくてですね。何で瑚太郎は私達も手伝う前提で話を進めてるんですか？」

ああ、なるほど。

唐突に依頼されて困惑しているんだな。

確かにそれなら無理もない。

きちんと理由も教えてやらなきゃ。

ちはやと面と向かう。

そして、ちゃんと手伝って欲しい理由を告げる。

「お前が（魔物使いとしての力が）必要なんだ」

ボボボボンッ！！

ちはやの頭から瞬間沸騰したヤカンみたいな湯気が立ち込める。

顔も心なしか赤い。

「な、ななな！！」

ふむ、やっぱり困惑しちまうか。

なら仕方ないな。

小鳥とも仲良くなって欲しいし、ここは女子2人で遊ばせてやろう。

「無理なら仕方ないな。まあ、何か不思議な出来事を見付けたら教えてくれよ」

さっさとその場を立ち去る。

やっぱり1人で探索は寂しくなりそうだ。

さて、1人寂しく街に出掛けてみた訳なんだが……

「何かある訳がないか」

がむしやらに回っても何がある訳もなかった。

というか以前は適当に歩き回るだけで非日常のど真ん中に放り込まれてたのに……。

いや、放り込まれないのが普通なんだけどさ。

「そろそろ進展あっても良くね？」

こうなると俺の好奇心は止まらない。

止まらないんだああああああっ！！

「森にでも行ってみるか？」

こっちに来てから箒作の心霊現象は起こる事もなかった。

「……」

メリットとデメリット——どちらが大きい？

俺は今ガーディアンともガイアとも無関係の一般人だ。

それから生まれるデメリットはない。

どちらにしても組織の内部へと食い込んで、状況を逐一知る事ができる。

デメリット——というよりも問題は今ここで正体を晒す事が正解であるか否か……その違いだ。

籌と敵対する事になれば失敗。

世界は滅亡へのカウントを止めない。

あいつと敵対関係になりそうなら——先に会ってみるか。

今日の不思議探索は森にしよう。

家に帰り、十分な準備をして森に足を運んだ。

最初は道があって、歩みは止まらなかったものの、奥まで進むと気付けば木々が空を隠してしまっていた。

それでも目的地までは遠い。

いや、そもそも辿り着けるのかという疑問が沸く。

確かに篝は居るだろう。

けど、俺と会ってくれるか？

少なくとも俺と篝に面識はあるはずだ。

俺の分岐点とも言える大怪我に篝は関わっている。

良い印象を持たれた覚えもない。

捕まえようとしてたしな。

「あゝ、あと1時間したら帰るか」

草も俺の身長まである。

魔物やら魔物使いに遭遇したら面倒だしな。

探索は更に慎重になる。

音を立てないようにするのは環境上難しく、大木の陰に身を潜めながら進む。

ペースは落ちてしまいが、変な奴らに会うよりはマシだ。

「……あれ？ 待てよ、確かこの先って――」

箒に会いたいが為に適当に進軍――（单身だけど）したら見覚えのある場所に出た。

「こいつは……」

濁った虹みたいな沼。

水質汚濁の見本みたいなものだと思った。

確かこの沼は俺の――いや、箒の力か。

「近くに箒が居るのか？」

いや、そうとは思えない……な。

でも探してみる価値はあるか。

「よっしゃ――!!」

気合いを入れ直し、宛もない森を歩いていく。

「やっぱり見付からないよな」

あれから1時間近くは休まず歩いたが、成果はなしだ。

これ以上は何も得られないだろうと思い、踵を返した時だった。

そこには得体の知れない化け物——魔物が居た。

姿形はとても人間のものではない。

例えるならば、鬼だ。

絵本で連想されるものと大差ない。

さすがに縞パンは穿いていないが、棘が至る所に付いたこん棒は持っていた。

初めて見るタイプだ。

少なくとも、どんな攻撃を仕掛けて来るかは想像するに困らない。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

鬼の咆哮が上がる。

こん棒が振り上がると——空間を裂く形で振り下ろされた。

「チィッ!!」

避けられなくはない。

横へ思いつ切り跳ぶ。

こん棒は近くの木の根を砕き、木が倒れる。

そのまま地面に月面顔負けのクレーターを作成する。

今の俺じゃ届かない。

「いや、落ち着け」

そう簡単に決め付けるべきじゃない。

事はそう難しくないはずだ。

冷静に対処しろ。

道は見えて来るはずだ。

いや“すでに見えてるはずなんだ。”

鬼とは言え体型は人間がベースのはずなんだ。

だったら弱点は心臓——つまり、

「左胸だ!!」

ワカメ……もとい、オーロラブレードを展開する。

しかしフニャフニャとしたものではなく、鋭い剣の形を強くイメージする。

同時に、鬼もその巨大なこん棒で襲い掛かってくる。

「ぐっ!!」

右から左へ振るわれるこん棒。

それをブレードで受け止め——いや、駄目だ。

こん棒がブレードに当たる寸前に真後ろに跳んだ。

ブレードはそこまで強固な造りをしてはいない。

恐らく、あの威力のこん棒にへし折られる。

これだからパワーファイターは嫌なんだ。

下手すりゃ身体ごと潰されておだぶつだ。

くそ。攻撃は一撃で倒すしかねえ。

急所さえ突けばあの鬼は倒せるはずなんだ。

なら——一気に片を付けてやる!!

足に力を入れて、鬼に飛び掛かるように向かっていく。

鬼も近付かせまいとして、こん棒を振り回してくる。

威力が大きいのは認める。だけど、当たらなければどうという事はない。

単調過ぎる動き故に避ける事も容易い。

鬼の懷にたどり着くのは簡単であつた。

「これで――」

ブレードを心臓めがけて、

「終わりだ!!」

突き刺した。

簡単に心臓を貫き、そして鬼は光の粒子となって消える。

「でも、この奥にまだ何かあるってのか？」

分からない。

でも探索の必要があるな。

「ここまで来たらやってやるよ」

俺は勢いよく森の最深部へたどり着く為に進んでいく。

結局成果は上げられずに終わったのだが。

それにしても篝――お前とはいつになったら会えるんだ？

日常？（前書き）

今宮・西九条参上☆

日常？

「ふむ。どれが良いか――」

俺は今非常に困っていた。

「瑚太郎君。まだ決まらないの？」

「待ってくれ！！これはかなり重要な事なんだ！！」

そう簡単に決められない。俺の財布の中身はお世辞にも良いものではない。

「カメラを買うのって、そんなに悩むものなの？」

「そういうものなんだ！！」

これはいくら小鳥とは言え邪魔立てはさせない。カメラは今の俺にはお金を得る為の手段の一つでもあるからだ。

ああ、今の状況が飲み込めない人もいるだろうから説明をしておかなくちゃな。

普通にカメラ屋でカメラを選んでも――終わり。

あつ、うん。だってそれ以上の説明のしようがないんだもの。簡素になるのは仕方ないんだって！！

俺がカメラの吟味をしてる理由は性能の良さを取るか、値段を取る

か——その二択だ。

「あら？　天王寺君に神戸さん？」

「西九条先生」

小鳥が西九条が現れた事に気付き挨拶していた。

西九条灯花——俺の通う学園の静流を溺愛する先生で、ガーディアンのメンバーだ。そして、俺が篝が原因で一時的に身体の成長が止まってしまう前の同期だ。

「西九条先生……何をしてるんですか？」

「ちょっと知り合いに会いに来たのよ」

そんな彼女の格好はスーツ姿だった。「商談をする為に来ました」と言っても通じるんじゃないかと思えた。

「知り合いって、彼氏さんですか？」

「残念ハズレ。仕事の同僚に会いに来たのよ」

同僚？　この近辺で西九条の同僚って言ったら——まさか……

「おお、西九条じゃん。こんなところで何やってんの？」

——来る。きっと来る。きっと来る。

あれ？　今妙な電波を受信してしまったような——気のせいかな？

ってか、今宮あああああ！　お前こんなところで何してんの
おおおおおっ！？

店員の格好してるけど潜入捜査だよな？　そうだよな？

「なにになに？　西九条ってばいつの間に子供がそんなに大きくなっ
たんよ？」

「今宮君。言ってて楽しい冗談と不快になる冗談の2つがあるんだ
けど――君のはどっちかな？」

ゾゾゾッ！！　とどす黒いオーラが西九条の背後から湧き出てい
た。

ひいいいっ！？　ヤバいってゝ！！

「ほらほら怒るなって！！　生徒の前だぜ」

「……はあ」

毒気を抜かれたように西九条は溜め息を着いた。

「それよか話は聞かせて貰ったぜ。カメラを探してるんだって？」

「あ――は、はい」

あつぶね。思わず「ああ」とか相槌を打つところだった。

「っで、どっちを買うのか迷っているの？」

「ええ……今宮さんのオススメがありますか？」

「そうだな。俺っちなら——」

カメラをたっぷりと吟味する。そして、安い方を手に取る。

「こっちな」

「分かりました。それじゃこっちな」

今宮が手にしたのは違うもう片方を選ぶ。

「ちよいと瑚太朗爺さんや。店員のオススメを無視しちゃってええのかい？」

「小鳥婆さんや。それは目が曇っちょらんか？ 見てみい奴のチャライ格好を。何処が店員に見えるんだい？」

「明らかに俺っちに質問したよな！？」

うるさいな。こっちは真剣に選んどるんじゃない。

「ははっ。今宮君の信頼の無さを讀まれたんじゃない？ もしくは知っていたか」

「そんなまさか」

うう。当たらずも遠からずか。

西九条と今宮は俺を知っている。俺は知らないはずなんだ。只知道っているようなからかいぶりは疑いを持たれてしまっているようだ。

「まあ、そんな事はどうでもいい。このカメラが欲しいのか？」

「はい。機能性は十分ですし、効率を取って多めに払うなら良いでしょう」

「そうか——なら、俺が支払ってやるよ」

「良いんですか？」

あの今宮が奢ってくれるだと？　どんな裏があると言うのだ？

「俺とお前は今から親友だ。その印って事で」

いやいや、いくら今宮相手でもそういう訳にも行かないって。

「遠慮すんな。お前は金に余裕がなさそうだしな。むしろ使わなきゃ次のボーナスお預けだから使い道ができてよかったわ」

「……………分かりましたよ」

こうなった時の今宮は決定したなら止まらない。おとなしく従うしかないのだ。

「子供はそうでなきゃな」

うんうん——と満足げに今宮は頷いた。

無事に購入は済んだが、あの後に今宮に振り回されたのはちよつとだけ先の話。

日常？（前書き）

まあ、ちょいちょいとのおんびりと更新して行きます

日常？

深夜にごつつ美味しいラーメン屋があるという噂が、ここ風祭市に広がっている。

さて、俺もそんな噂に釣られた——というよりも心当たりがあった。どうせ会おうと思っていたのだから、せっかくの機会だし会いに行こうと思いついたのだ。

「という訳なんだ」

「だからといって出歩いて良いものなんですか？」

ラーメン屋を探す旅の途中で俺はちはやと出会ったのだ。

「ちはやだってラーメン食べたいから来たんだろ？　ってか、咲夜はどうした？」

「うう……その通りです。咲夜は家で留守番をしています」

咲夜の事だからちはやを1人にするとは思えないんだが……まあ、過保護じゃないだけ良いか。

「でもどこでお店をやってるんですかね？」

「聞いた話なんだが、公園でやってるっぽいな」

聞いた話というか、経験上なんだがね。

「それじゃ早く行きましょう」

随分と目がキラキラしていらっしゃる。

まあ、俺も早く江坂さん達に会いたいし、全は急げだ。

目的の公園に着けば、はたしてラーメン屋は営業していた。

ちなみに、今の文章で使われた「はたして」は「やはり」とかの言葉と同じ意味である。たまに使うから覚えておくように。学生の皆も覚えておいて損はないぞ。

「どうも。失礼します」

っと、柄にもなく文法講座をしてる間にちはやがラーメン屋の暖簾のれんを潜っていた。

「ヘイ、らっしゃい!!」

俺も続いてラーメン屋に突入する。

「おや？ カップルかい？ いやはや、最近の若い奴らは見せ付けに来るのが趣味ってか」

白い歯を見せながら笑うおやつさん。やべ、名前忘れた。

「い、いや……カカカカカップルじゃなくて——友達です!!
ベストフレンドです!!」

ちはやが早口におやつさんの言った事を否定する。怒ってるからか、顔も少し赤い。

「まあ、座りや。今回はたどり着いた褒美にタダで食わせてやるよ!!」

相変わらず豪快な人だなあ。

「本当ですか!?! ありがとうございます!!」

顔を輝かせて席に着くちはや。少しは遠慮してやれよと願いつつ俺も席に座る。

ラーメン屋の構造は変わっていない。屋台型の真ん中には店主が、その周囲を囲う形でカウンター席がある。

「誰か来たのか?」

俺達とは反対側からおやつさんに尋ねる声がした。やっぱしというか、聞き覚えのある声だった。

店主の身体が邪魔をして見えないが、少し顔を横に向けるとそこに居る人物を目で確認できた。

「ル——委員長に、静流」

「て、天王寺!? それに鳳も——」

前は静流だけだったんだけど、今回はルチアにちはやまで居るし……ちなみに静流はルチアの隣で黙々とラーメンを啜^{すす}っていた。

「瑚太郎。それにちーも。こんばんは」

口に含んでいたラーメンを飲み込むと、静流が片手を上げて夜中の挨拶をしてくる。

「こんばんは静流」

「こんばんはです」

「なんでえ、知り合いだったのかい？」

おやっさんが言いながら俺とちはやの分のラーメンを用意してくれた。

「「ありがとうございます」」

2人揃って礼を告げる。

そして無言でラーメンを食べ始める。

「ふむ、今日は千客万来のようだな」

来た！！ 聞き覚えのある渋い声のする方へ顔を向ける。

「江坂さん」

ルチアが江坂さんに向けて敬意を払ってか、立ち上がった。

「そう畏まらないでくれ」

「す、すいません——つい」

つい、で畏まるもんなのか？ ルチアがそういう事に細かいってのもあるんだろうけど。

「そちらの恋人2人は？」

「ぶふっ!？」

ちはやが驚きのあまり、口に含んでいたものを吐き出しそうになったが気合いで戻したようだ。

「ちはやだけでなく、実は委員長と静流とも付き合っている天王寺瑚太郎です」

「私は江坂だ。その2人の親代わりみたいなものだ」

やっぱり江坂さんは良い人だね。横から俺の肉の皮を引きちぎらんとする冗談の通じないルチアやちはやとは偉い違いだ。

見てみる、静流なんて抱き締めたい位に顔を真っ赤にしてこちらをチラチラと横目で見ながらラーメンを食べてるぞ。

可愛い。実に可愛らし——ゲフンゲフン。失礼、俺とした事が静流の可愛らしさに暴走してしまったようだな。

「学生をしとるのかね？」

「ええ、今は学生をしています。ルチアとちはやとは同級生で、静流は一個下です」

江坂さんの確認の意味を込めた問いに負けずと返してやる。

「そうか。2人が世話になっているようだな」

「いえ。むしろ私達は天王寺に迷惑を掛けられ――」

「ならば君にこれを授けよう」

良いのか？ 言葉を遮られたルチアが阿修羅も裸足で逃げ出す程の厳つい顔を作っておられる。あとできちんとフォローしとこ。

江坂さんから渡されたのは名刺だった。

「何かあれば連絡をくれたまえ。できる事なら力になろう」

「ありがとうございます」

江坂さんに礼を告げると嵐のように過ぎ去って行った。

あとでルチアとちはやから問答をされたのは――予想内の範囲だ。

部活動？（前書き）

コミケとか、他のサイトの小説作成とかで遅れました。

では、どうぞい。

部活動？

「さあ！！ 部活をしよう！！」

「「おっっ！！」」

「お」

俺の掛け声と共に力強く拳がる腕と声。それに相反してめがっさテンションの低い会長殿。

「会長——いくらなんでも部長なんですからもっとテンション上げましようよ」

「良いじゃない。その2人はやる気満々の様子よ」

「いや、まあそうですけど……」

部室には俺と会長の他に小鳥、それにちはやも居る。小鳥は俺が誘ったってのもあるが、ちはやが最初っからいるのはどういう事なんだ？

あっ、別にちはやが嫌いとかそんな事はないぞ。ちはやの可愛さは今から語るにしても時間が足りない位で——って、

「そんな事を言って騙されませんよ」

「何を騙すのよ？」

朱音が呆れたように言う。

むう、そうだった。朱音は魔女だったな。そうやって知らない間に俺の思考を別の方向へと……

「何だか私が悪いような方向になっているのは気のせいかしら？」

「多分……気のせいじゃないかと――」

「瑚太朗君の悪い癖さね」

「何か言ったか？」

「「いや、別に」」

何か言われたような気がするんだが――勘違いだったか？ まあ、いいや。

「それで……部活をするのは良いんですが、何をするんですか？」

「ふむ、それは良い質問だよちはや君」

仁王立ちで俺は踏ん反り返る。

めちゃくちゃ偉そうな俺の態度に全員がシラけている。

「この辺でツチノコが発見されたって情報を入手したんだ」

「じゃあツチノコを探すの？」

「イエス!! さっすがミスター小鳥」

「私、女だからミスターじゃなくてミスだよ」

小鳥からの正しいご指摘が入りました。

「でも信用できる情報なんですか？」

「いえ、全然!!」

俺が自信満々に言うのと二度目の全員からのシラけた視線を喰らう。

「お前は全く信頼性のない情報を宛にするの？」

「まあ、会長の言う事も最もだけど」

俺は拳を力一杯握り込む。

「夢は——見るもんなんだ!!」

「わあ、瑚太朗君の後ろに何やら真っ赤な炎が見えるよ!!」

「いや、それは気のせいよ」

せっかく小鳥が乗ってくれたというのに——肝心の会長はノリが悪い。

「まあ学校の近辺なら近いんだし、探すのは良いですよ」

ちはやが俺の意見に賛同してくれた。

「私も。学校なら遠くないから構わないよ」

「私はこの部屋から出たくないからパス」

朱音はそう来ると思ってたよ。

この後にまた世話になるだろうし、今回は見逃してあげますか。

「無理には誘いませんよ。なら3人で行くか」

「「おっ！！」」

2人が天高く腕を突き上げる。

「やっぱりツチノコを目撃情報はないですね」

「分かってはいたんだけどね」

学校の廊下でちはやと小鳥がそう言う。まあ、俺も分かっちゃいたが。

「そういう事らしいな」

「おい、何だってお前は俺の両腕を縛ってやがるんだ？」

俺の隣には吉野が縄で腕を後ろにして縛られた状態で立っている。

「いや、なんとなく」

「なんとなくで俺は拘束されてるのかよ!!」

やはり無理に連れてきたのは問題だったようだな。

「それなら今度吉野の応援歌を作ってやるよ」

「いらんわ!!」

なんだよ、結構な評判だったと隣町の岡崎やアッキーが教えてくれたんだぞ。試しに動画サイトに載せたら最高の出来だとの意見をハンドルネーム『プリンセスアスカ』からいただいたんだ。

あっ、なるほどな。吉野は俺の作った応援歌の出来を知らない。知ってくれば吉野も気が変わるだろう。

「任せとけて。最高の出来になる事は間違いない」

「作る事を前提に進めてるんじゃないねえ!!」

全く、吉野ってばツンデレなんだな。仕方ない、期待に答えて作ってやるか。

「瑚太朗君ってばろくな事を考えてなさそうだよ」

小鳥が溜め息を着きながら何かを呟いた。はて？ 何と言ったのだろうか？

「ってか、お前らはツチノコを見つけなくて良いのかよ？」

「見付けようにも目撃情報がなさすぎるって話だ」

「それなら中庭はどうなんだ？」

「中庭？」

吉野は何かしらの情報を入手していたのか？

「そこで蛇みたいのを見たって話だ。真実は知らないがな」

「よしっ！！ 現場に向かうぞ」

「うん」

「分かりました」

小鳥とちはやが頷いて中庭に走る。俺も行かなきゃな。

「ちょっと待て！！ 行くなら縄を解いてからにしろおおおおお
おおっ！！！」

「こちら辺に居るかと思ったけど——いないな」

「とりあえず、おいしい棒のキムチ味を買って来ようか？」

「いや、たいやき味を頼みたいんだが」

「なんですか、その微妙な味のチョイスは……」

ツチノコが見付からないせいでくだらない漫才する始末だ。

「ねえ瑚太郎君。あれって……」

小鳥が指差す方向——花壇に見た事のない蛇が、ツチノコが。

「ちはや、君に決めた!!」

「私はポケ○ンじゃないですよ!!」

とか言いつつもちはやはツチノコに向かって走り出す。

しかしツチノコは右へ左へと木の葉みたくヒラヒラしながらかわすのだ。

「さて、と——」

花壇の後ろへと回り込む。種は分かってるし、いちいち付き合う義理はない。

「なあゝに、やってんですか」

「わあっ!？」

よほど驚いたのか、女性は手に持っていた釣竿を落としてこちらを向いた。

「瑚太朗、ツチノコを捕まえ——って、この状況はどうなってるんですか？」

ちはやが“ツチノコの人形”を手に戻って来た。

「まあ、種明かしをすればこの女の人がある釣竿を使って、あたかもツチノコが居るように見せ掛ける為にその人形を使ってたって所か」

「じゃあ、ツチノコは居ないって事？」

「そうなるな」

ちはやと小鳥は揃って大きな溜め息をつく。

女性がオロオロとしていたので俺が帰って貰うように言うて帰って貰った。

確かガイアの人だったな。島子は元気にしてるかな？ 最後に会ったのも随分と前だから。

「どうかした？ 瑚太朗君？」

「いや、何でもない。それよりも夕方だし帰るか」

「そだね」

「帰りましょうか」

両手に華とはこの事だな。俺達は帰路に着くのだった。

その日の夜――吉野から『てめえ、明日覚悟しとけ！！』と怒りを込めたメールが届いた。

やべ、吉野の事を忘れてたな。まあ気にする必要もないか。寝よう。

部活動？（前書き）

んじゃま、ゆっくり続きと行きましようか

部活動？

「部員を増やそう！！」

「「はい？」」

部員の少ない部活動の定番と言えば部員を増やす事だ。まあ、研究会だから部員とか部活動とかは違和感が残るんだけど。

その事に気付いた自称天才学生・天王寺瑚太朗こと俺は放課後に希代の魔物使い達に提案したのだが――何だか微妙な反応だ。

「何だよ？ 部員は増やしてこそだろう？」

「それはそうですが……」

「誰か入りたいがる奴が居るのかって話よ」

ちはやが言いづらそうに口をモゴモゴと動かした後に朱音が言いたい事をズバリ言ってくれた。

「そこは大丈夫ですとも。俺だって入ってくれそうな人に心当たりがありますから」

正確には俺が入部させたいってだけの話だけだな。

「心当たりって？」

「それは連れて来てのお楽しみだ。とりあえず待たせてるから、皆

は茶でも啜って待っててくれよな」

さて、オカルト研究会のメンバーを揃えに行きますか。

俺が連れて来ると宣言してから1時間が経過し、

「約束通りに部員を連れて来た」

「連れて来られた」

本当はルチアにも声を掛ける予定だったんだが、諸事情により無理でした。

「やほ、静流ちゃん」

「こんにちはです」

「コトリ、ちーも。こんにちは」

いつの間に2人と仲良くなってたんだ？ まあ別に困る事じゃない。むしろ静流が恥ずかしがらずに話すなんて進歩しているじゃないか。

「こんな非科学的な研究会に入ろうだなんて物好きも居たものね」

「会長、曲がりなりにもオカ研のボスなんだからメタ発言禁止ですよ」

本当、朱音のこれにも困ったもんだよ。

いくら隠れる為とは言え、オカ研立ち上げる必要なかったんじゃないかねか？

「んじゃ、静流。オカ研に入るって事で良いか？」

「瑚太朗が居るなら、喜んで入ろう」

ピキィィンッ！！

今、世界が凍り付いた。

え？ 何？ 体感温度がさりげなく急激に下がった気がする。

うわわっ、ちはやから刺し殺すような視線が。あれ？ 小鳥からも

――

「天王寺瑚太朗おおおっ！！」

世界を揺るがさんばかりに声を張り上げながら、敵陣の将を討たんとする勢いで乗り込んできた兵士を連想してしまったのは内緒にしておこう。

オカ研の入口を壊してしまいそうな力加減で部屋に乱入してきたのはルチアだった。

「委員長。どうかしたか？」

「どうもこうもない！！ 静流を誘拐して、あまつさえ——」

「待て待て待て！！ お前はどれだけ柔軟な発送力を持ってるんだよ」

濡れ衣にも程があるぞ。今の続く言葉は恐らく——いや、やめよう。想像するだけで俺自身が傷付きそうだ。

「ルチア？」

静流がルチアの乱入に首を傾^{かし}げる。何がどうなっているのか理解はされていない様子だ。

仕方ない。不本意ながら静流に状況説明をして貰おう。

ルチアが耳を傾^{かたむ}けるとしたら、俺より静流のはずだ。

という訳で、俺は静流に状況説明↓ルチアに静流がここにいる理由を明かして貰うという方向で話を進めた。

ルチアがようやく納得してくれたようだが……終始、ちはやと小鳥が俺を睨んでいた——なんでだ？

部活動？（前書き）

やってしまった

後悔はしていない——多分

部活動？

「吉野の応援歌を作ろう！！」

元気良く部室の扉を開けて、以前から企画していた事を部活メンバーに告げた。

その反応は揃って――

「……………はい？」×5

啞然とした顔で全員が俺を見る。

「何だよ？ 吉野の為に応援歌を作ってやる気にならないのか？」

「別に」×5

うおいつ！！ それはヨッシーノに失礼じゃねえか！！

「部活動の時に応援歌を作る約束してくれただろ！！」

「それって瑚太朗君が自分で勝手に約束しただけじゃない」

小鳥さん。それは言っちゃならねえお約束よ。

「まあ、吉野君にはうちの瑚太朗君がお世話になってるから応援歌を作る事に反対はしないよ」

小鳥さん。人間ができている。さすが俺の幼なじみだ。

でも俺が吉野の世話になってるってのは聞き捨てならないが。

「具体的にはどうするの？」

朱音を始め、部活メンバーが俺を見てくる。

「協力してくれるのか？」

「他人の為ならな、私利私欲でやるって言うなら手伝わないが」

ルチアが代表して答えてくれた。

おお、今俺は片膝を付いて崇めたい位に輝いてる。ルチアが輝いてるぞおおおお！！

他の皆も協力してくれるなんて——こんなに嬉しい事はない。

「んじゃ、早速——」

俺の指示の下、吉野応援歌（改）の制作が始まった。

吉野の応援歌を作ると宣言した翌日に目的の物は完成した。

『吉野応援歌（改）』とか言ってた癖に結局は前回のものとはほぼ瓜二つになってしまった。後悔はしてないけど。

そして放課後に鑑賞会を開いた。

鳩が豆鉄砲喰らった顔をしているところを見ると何だか誇らしくなってくる。

どうやら完成度も申し分なさそうだ。

「これ瑚太郎君が作ったんだよね？」

「何をおっしゃる小鳥さんや。俺の目の下の隈が全てを物語っているじゃありませんか」

徹夜で完成したは良いが、そっちばかりを気にしたせいで身体の事は完全に度外視していた。

「なんというか……」

「天王寺らしいわね」

ガイア連邦軍のちはやと朱音が苦笑しながら俺の吉野応援歌をそう評する。

「でもコタローらしくて良いと思う」

俺の作品を快く評価してくれる静流。さっすが俺のよーげフン、

何やら妙な電波を受け取ったようだ。

「一応聞くが……これを吉野に見せるのか？」

「ザツツライト委員長」

秀才っぽく見せようと英語を使ってみました。後悔はすごくしてます。

「私達は構わないが――」

「なら良いじゃんか。早速吉野を呼んでくるぜ」

勢い良く部室を飛び出して吉野を呼びに行く。

携帯？ 学校には持って来てはいけません。俺は持って来てるけど。

「あれ見て吉野君が怒らないと良いけど……」

部室を出る寸前に小鳥のそんな呟きが聞こえた気がした。

10分後、俺は吉野を引き連れて部室へと到着した。

この前置き去りにしたのを怒っていたが、とりあえずスルーした。

本人もさほど気にしてる様子もないしな。

「何だよ天王寺。俺に見せたいものって？」

「ふふふっ、これだ!!」

と言って見せたのは1枚のDVDである。

「これをお前に渡したくてな」

「見せるというか渡すだけかよ」

ふむ、伝え方にかなりの語弊があつたようだ。まあ構わないか。

「これには何が入ってるんだ？ 言っとくがパソコンのゲームとか
だったら俺はやらないぞ」

「そういうのじゃないって。俺の作った『吉野応援歌』が入ってる
んだ」

「……………今、何て言った？」

「なんだ聞こえなかったのか。ならもう一回教えてやるよ。お前の
応援歌が入ってる」

最初は歌だけにしようかと思ったけど、やっぱり動画も作るべきだ
と思って動画も作った。

自分で言うのもなんだが結構な完成度だと胸を張れる。

「本当に作ったのかよ」

「まあ、せっかくだし貰ってくれよ」

「ふん、ライバルにS u g a rを送るなんて余裕だな」

吉野がどこか照れ臭そうに言う。喜んではくれたようだ――が、

「吉野、相手に送るのはS a l t（塩）であってS u g a r（砂糖）じゃないぞ」

「……………」

恥ずかしさで顔が真っ赤に染まる。

それを誤魔化すようにD V Dをふんだくり、踵を返す。

「とりあえずこれは貰ってってやるよ」

なんというツンデレ。

そう捨て台詞を残して吉野は去って行った。

その日の夜、吉野から「天王寺iiiiiiiiいっ!」と恨み籠った電話が来た。

部活動？（後書き）

吉野応援歌を知らない人はニコニコで検索しよう

残念ながら吉野スイッチはやれないのでお蔵入りに

非日常？（前書き）

久々のちやっちい戦闘シーンや。

やっぱ一人称の戦闘シーンは苦手だよい。

非日常？

「瑚太郎君。ペットを飼う事にしたよ」

休日という学校がない日に神戸家のインターホンを鳴らした俺に、小鳥がそうノリノリで言ってきた。

「ペットって、いったいなんだ？」

「この子だよ。おいでちびもす」

「あんっ!!」

俺の足元で犬……というかなにこれ？　ちっちゃい象さんにピンク色の毛を付けたみたいなものと言った方が正しいな。

でもそこは言っちゃいけないんだよな。確か攪乱の魔術だかが使われてるはずだから。

「ちびもすか」

「あんっ!!」

懐かしくて無意識の内にちびもすの名を呼んだだけだが、自分が呼ばれたのだと勘違いしたように鳴く。

「にしても、よくペットを飼う気になったよな？」

「家の前で倒れてたってのもあるけどね」

それらしい理由だ。深く追求せずに乗っかる事にしておこう。

「っで？ このちびもすの買い物にでも行くのか？」

「そだね。って、事で荷物持ちを頼める？」

「はあ……しゃあないな。小鳥のお願いだからな」

1人にしといても不安が残るからな。それにせつかく誘われてんだ、
付いて行かない道理はない。

「小鳥。この荷物の量はないんじゃないか？」

「良いじゃないのさ、瑚太朗君は男の子でしょ？ もうちょっと頑
張りなさい」

叱咤されてしまいました。

ちびもすは俺の頭が定位置として気に入ったのかそこに居きよを構えて
しまっている。

なんだ？ そこからの眺めは気持ち良いのか？

眼鏡の大佐みたく「人がゴミのようだ」とは思わないように教育しなくちゃな。

「つて、おい待ってくれよ小鳥」

「遅いよ瑚太朗君。早く早く」

そう急かされてもあなたから持たされた荷物のせいで上手く動けないんですがね。

リライターを使いたくなって来たよ。

つて、こら裏路地に入るなよ。

「ちびもす。悪いが走るぞ。しっかり掴まっとけ」

「あんっ!!」

本当は走りたくないけど近道で裏路地に入られちゃ堪ったもんじゃない。見失う前に追い付か――

「あれ？」

入った瞬間に唐突な違和感に襲われた。

「また入っちゃったのか」

“もう一つの風祭り”

だとすればどこかに出口があるはずだ。

「ガイアもしっかり管理しろよな」

「あんっ!!」

俺の独り言をちびもすがきちんと返してくれる。

君は実に素晴らしい。驍が行き届いてるな。くれぐれも光る石に近付くなよ、目をやられるからな。

「よし、行くぞちびもす」

「あんっ!!」

俺とちびもすの大冒険が、今ここに幕を開ける。

多分1時間もすりゃへばるだろうが。

前言撤回したい。30分も保たなかった。

くそ、両手にぶら下がった荷物さえなけりや――

「愚痴っても仕方ないか」

鬱屈そうになる気分を抑えながら無限回廊化した裏路地を歩き進む。

「はあ……ちびもすが居てくれて良かったよ。1人は寂しいからよ」

「あんっ!!」

良くできた犬――ってか魔物か。

「しかし、どこまで続くんだ？」

「あんっ!! あんっ!!」

諦めるなよ!! と言われてる気がした。

よっしゃ、もうちょっと頑張るとしましうか!!

とは言えよちびもす。鬱屈になってたのはお前のご主人様が持たせた荷物のせいだからな？

「クウウーン」

「どうかしたか？」

せっかく人がやる気になっているというのに――だが、ちびもすのこの反応は……

「近くに何か居るのか？」

悪いが荷物を脇に置かせてもらう。

ちびもすの視線の方へ俺も向ける。

「——っ!!」

俺は思わず身体を強張らせた。

重い荷物なんか持ってたら面倒な事になってたな、いつぞやの黒い狼——と黒いフードを深く被ったローブの男か女か判別しづらい奴が脇に立っていた。

「何故、君はここにいる？」

「知るか、こっちが聞きたい」

ローブの（声からして）男は驚いた口調で俺を見てくる。

当然だが、俺は“巻き込まれた”としか言い様がない。巻き込まれたっていや、今回は吉野と学校の無限回廊には巻き込まれてないな。

まあ、その時ののは特に進展はなかったから構わないか。俺自身が覚えてるからパルとギルに会うのは十分だ。

「ここを知られた以上は生かしておけないな」

ローブの男の背後から黒い狼が1、2、3——と数が増えていく。

どんだけ命を消費するつもりだよ。

「ちびもす。悪いが荷物見といてくれ。無くして小鳥にどやされちゃ堪らないからな」

「……………あんっ!!」

やや間が合ったものの、ちびもすは元気良く返してくれた。

俺を信用してくれたんだろう。信頼は良い事だ。

「子供が——相手になるものか」

黒い狼が空中から1匹飛び掛かってくる。2匹ほど真正面から駆けてくる。

3匹か——面倒だけど1匹ずつ潰すのがベストだな。

裏路地だから狭いが、少なくとも避ける必要はない。

地面を思いっ切り蹴り上げて1匹目に俺自ら飛び掛かる。狙うは空中にいるやつ。

「でやあっ!!」

膝蹴りを噛ましてやる。顔面に見事突き刺さり、そのまま二転三転していく。

「があっ!!」

空中から地面に降り立つまでにタイムラグは発生する。

それを見逃してくれるほど黒い狼も甘くはないのは痛感している。
案の定、飛び掛かってくる。

さて、こっちに来てから初めてだけどきちゃんと機能してくれよ。

イメージするのは鞭の形。その鞭の形は俺の右腕に表れた。

スッと、虹色のオーラが綱のように太い形で伸びる。それを目でなく、肌で感じると腕を右から左へと振るった。

鞭は黒い狼を両断し、光の粒子へと変貌させたのだ。

「こんな事が――」

魔物使いは信じられないような目でこちらを見ってくる。

俺からすれば、その程度で挑んで来る気になれたもんだと返してやるよ。

「行け!!」

黒い狼が吠える。

やれやれ、今ので実力の差を目の当たりにできなかったようだ。

「完膚なきまでに叩きのめしてやるよ」

黒い狼が今度は5匹か、いったい何体出すつもりだ？ まあ、いくら来ようが潰してやるが。

未だにオーロラによる鞭は消していなかった。なので、鞭を強くイメージする。

「らあっ!!」

まるで蛇のようにウネウネと曲がりくねりながら黒い狼を切り裂いていく。

いやいや、自分でやって気付いたけど鞭なのに斬ってるよな？

「まあ、気にする事はねえや」

誰に何と言われようが勝てば良いんだからさ。

「またしても——」

三流の敵役が使いそうなセリフだな。ばい菌の敵はともかく現実でそんな事を口走る奴がいるなんて、お兄さんビックリだよ。

「あとはあんただけだぜ」

「出る!!」

おい、どれだけ命を投げ捨てる気だ？ これで10匹目だ。

「バカ野郎」

もう限界なんだ。殴ってでも止めてやる。

カッとなって走る俺。それを遮る黒い狼。

「邪魔だつての!!」

オーロラブレードの範囲で十分だった。2匹の黒い狼をすぐに土へ還す。

今にも魔物使いは新たな魔物を出す寸前だった。

「それ以上、力を使うな!!」

堅く左で拳を作る。

誰かを傷付ける為じゃない。名前なんか知らないが、こいつを救いたいのが為に振るう拳なんだ。

俺の左ストレートが突き刺さる。魔物使いが召喚しようとしたものは――ギリギリ召喚されなかった。

あれ?　　そーいや俺――手加減してねえ!!

何か竹トンボみたいに飛んでるし!!

あ、今『グキッ!!』とか変な音を起てて地面に落ちた。

「……………」

見なかった事にしよう。

「ちびもす、行くか」

「あんっ!!」

うん。ちびもすもこんな事は目に触れたくないようだ。

荷物を持つと、俺達は出口を求めて走り出した。

潜在意識というべきか、どうしても現場から逃げたくなる。

さ迷って俺達は1時間後に脱出した。

小鳥からは結局どやされ、戦闘で疲れた身体を引きずってその後に2時間買い物に付き合わされた。

今日俺が得たものは犯罪を起こした逃走する犯人の心理と小鳥に付き合わされて買った（ちなみに小鳥に奢りもした）パフェである。

無くしたものは体力と財布の中身である。

非日常？（前書き）

瑚太朗「みんな集まれ。瑚太朗と吉野の仲良しレイディオが始まるぞ」

吉野「待てよ、何で俺まで巻き込まれてる？」

瑚太朗「だって、暇そうなのが吉野しかいなかったから」

吉野「お前は暇だったからこんなくだらない企画を出したのか？」

瑚太朗「普通だろ？」

吉野「当たり前のように返すな！！」

瑚太朗「とりあえず今回限りで終わるかもしれないがな。作者は趣味以外には基本めんどくさがりだし、無気力だし」

吉野「こら、メタ発言すんな」

瑚太朗「まあ、今回は紹介だけで、実際にやるかどうかは読者数と作者の気分次第でくす」

吉野「どんだけめんどくさがりなんだよ」

瑚太朗「自分の性格が分かりきってるだけに、それを主人公にした話を考える位だからな」

吉野「もはやキャラの性格を考えるのまでめんどくさがるか……」

瑚太朗「でも設定付けは趣味の範囲だから思い付きらしいぜ」

吉野「作者のめんどくさがる基準が分からなくなってきたぞ」

瑚太朗「こんな感じでグダってやってます」

吉野「オチまでグダるか。てか無しかよ!!」

非日常？

どうも天王寺瑚太朗です。身体がとっても痛いのです。というか疲れたとです。

小鳥ってば人使い荒過ぎ。必死こいてちびもすと帰還したは良いけど、まさかあんなトラップが発動されるとは思わなかった。

そういえば思い出した事がある。

あの風祭市に似た世界って『圧縮空間』って言うんだったよな？

モヤモヤが少し晴れたぜ。

モヤモヤと言えはもう一つ、今日魔物使いに襲われた時に「パール」と「ギル」とか言ってたけど――ぱにじゃなかったかと思い始めたんだ。

うーん、どっちだったか……。

「会えば、分かると思う」

このモヤモヤを解消するには本人達に聞くしかない。

いずれは会う予定なんだ。それが早くなっただけよ。

そう考えると居てもたつてもいられずに深夜の学校へと向かうのだった。

とりあえず時間前に潜入成功つと。

途中の坂道で「あんパン」っていう女の子が居たのが気になったけど——それよか、こっちの事だな。

上手く学校には潜入できた分には構わないな。

「天王寺、何をしてるの？」

「うおおおっ!？」

「驚き過ぎよ」

「って、朱音——会長か」

「今、どさくさに紛れて私の名前を言わなかった？」

「す、すいません」

やべっ、癖でつい——

「別に構わないけれど。それよりも天王寺は何をしているの？」

「えと、それは会長もなんじゃ？」

「私は良いのよ」

朱音は良いって……そりゃこの学園はガイアが作ったもんだし、朱音はそのトップだからってのもあるから不思議じゃないが。

「っで？ 天王寺は何をしに来たの？」

「えっと――」

どうする？ どうしたら俺はこの状況を打開できる？

何か、何か打開策はないか？

くっ、こうなりゃ――仕方ない。出たところ勝負だ！！

「実はですね、会長が学校に居るって情報をキャッチしたんですよ」

「私が居るって、どこから得た情報よ？」

「えと、三枝さん家の親戚の二木さんから……」

「誰よそれは？」

朱音が呆れて半目でこちらを睨んで来る。

「それに私が居るからって、あなたが来る理由にはならないのではなくて？」

「いやいや、そんな事はないですよ。会長は美人さんだから、会いに行けるなら会いに行くのが礼儀ですって」

「ふむ——そう言われて悪い気はしないわね」

おっ、なかなかの好感触だ。

けど、今日の目的は学園を我が家みたく利用する妖精さんに会う事だ。名残惜しいが朱音とはここでお別れだ。

「それじゃあ、俺は忘れ物を取りに行くから。会長も気を付けて帰りなよ」

俺は早口に来た理由をでっちあげ、目的の廊下を目指すのだった。

ジャスト午前0時に俺は学校の廊下を訪れ——見事、圧縮空間に放り込まれました。

こうも上手いくものなのか？ それとも俺がそういう星の下に生まれたってのか？

「まっ、望んだ展開だから良いか」

目指すはぎるとばにの待つ地下室みたいな部屋。ってか、この期に及んでぎるとばにで良かったかどうかの判断ができやしない。世話になったというのに簡単に忘れちゃうとは俺も薄情なもんだ。

階段をひたすらに下りていく。下りても下りても階段が終わる気配はない。

俺の能力だって――血行を良くしたり、書換能力と^{リライター}籌のオーロラしかない訳で、何とかできるものはない。

ってか、ダブルどころかトリプルホルダーってどうなのよ？ もし気付かれたらガイアやガーディアンにいつ狙われるか分かりやしねえぞ。

「まあ、バレにくいだろうから気にする事はないかな」

オーロラはともかく、他のは見た目じゃ分かりづらいし。最悪ダブルホルダー止まりだろ。それでも珍しいだろうけど。

「などと考えていたら着きましたっ」と

随分とご都合主義だな。まるで神の見えざる手が使われているようだ。目の前に扉がポツンと置かれている。

まあ、そんな事はどうでもいいか。両開きの扉を開き、俺は中に足を踏み入れる。

扉の向こうはトンネルだった。より正確にはトンネルの天井を取っ

払ったような場所だ。

間違いない。ここにあの2匹はいる。何でそんな事が言えるかって？

「進入者め!! 懲らしめてやるぜ!!」

「ちょっとぎるちゃん」

だって、さっきから俺の上からそんな声が聞こえるんだから。

内緒話らしくて声のボリュームを小さくするぱに。残念ながら丸聞こえなんだけどな。

「覚悟しろ!!」

勢い良くとも言うべきか、空を切る音と共にぎるが俺に接近してくる。

「はあ……」

溜め息を漏らしながらぎるの方へ身体を向けて――腕を伸ばして、ぎるを捕まえる。

「な〜にしてるんだ？」

「ぐええええっ!?! お助け」

「ぎるちゃん!?!」

俺の手の中で暴れるぎる。ぱにもこちらにやって来た。

「安心しろ。別に取って食いやしねえよ」

「……………本当か？」

「ああ、信用しろよ」

「確かに、私達をどうこうする気はないみたいですわね」

ぱにが俺の意見に同意してくれた。

「もしも危害を加えるならもっと徹底的にやっているはずですよ」

「聡明だな」

さすがはぱにだ。ぎるとは違って話が分かる。

「そうだ。お前ら——えと……」

「オレはぎるだ」

「ぱにですわ」

名前を言い洩ると2人共自己紹介してくれた。

「俺は天王寺瑚太朗だ。それで、ぎるとぱにの2人は何でここに居るんだ？」

「実は——変な奴らに追われてて」

「変な奴らね」

はて、名前はなんだっけ？　ちはやの時に会っただけだからなく。
保志だっけか？　まあそのうち思い出すだろ。

ってか、まだ高校生なのに忘れ過ぎだよな。将来はどれだけ酷い事になるのやら。

「行くところがないって解釈で良いのか？」

「はい……」

ふむ、話題が悪かったな。暗い顔しやがってからに。

「なら家に来ないか？」

「良いのか？」

「ああ」

ぎるが身を乗り出して尋ねて来る。近いっての。

「俺もお前達に聞きたい事があるからな。嫌じゃなければだけど」

「でも瑚太郎さんが狙われてしまうかも」

「大丈夫だ。俺の境遇もきちんと話してやるから」

ある意味で筋書きのあるドラマみたいな話だしよ。退屈はしないだ

ろう。

「なら、お願いしますわ」

「よろしく頼むぜ」

「はいよ」

こうして小さな同居人をゲットした。

このあと帰り道を聞いたのは言うまでもないと思う。

非日常？（後書き）

ちなみに前回ぎるとばにの名前を間違えたのは本当に忘れて――る
訳がなく、仕様です（滝汗）

圧縮空間を忘れてたのも仕様です（華嚴の滝並の汗）

部活動？（前書き）

質問…欲しい物を挙げて下さい

鳳ちはやの答え…ロイヤルプリンセスパフェ

教師のコメント…確か隣町の店にあるパフェですよね？
実に鳳さんらしい回答です。

此花ルチアの答え…友達

教師のコメント…実に良い答えです。それに为什么呢、それ以外の深い意味を感じます

神戸小鳥の答え…両親

教師のコメント…とてもなく重い答えですね。すいませんでした。

天王寺瑚太朗の答え…無くした物を二度と失う事のない力

教師のコメント…このクラスはどうしてこんなに重いんですか？
これからどう接していけば良いか不安になります。

篝の答え…良い記憶

教師のコメント…考えさせられる、なかなかの意味のある良い回答
だと思いますが――その前にあなたは誰ですか？

部活動？

「だあゝ、勝てねゝ！！」

「ぎるちゃん！！ コントローラーを投げちゃいけません！！」

ぎるとばにが俺の家に来てから数日経った。

妖精の存在に驚かず、すんなりと受け入れた俺に逆に驚いたが――ぎるとばには思いの外、順応性が高いので深く追求せずに家に留まっている。

一緒にゲームをやる位にはなっている。

ただ、基本的にぎるが痼癪を起こして終わるのが常だったりするけど。

「ぎる、さすがに俺の私物だからな。短気を起こして壊すなよ」

「うっ、ご、ごめんなさい」

深々と頭を下げるぎる。

まあ、根は良い奴だからな。自分に非があると分かればきちんと謝るのは分かっているさ。

「ごめんなさい瑚太朗さん」

「気にするなよ。少なくとも今までよりは賑やかで楽しいからさ」

賑やか過ぎて近所迷惑になったのは黙っておこう。

「さて、そろそろ時間かな」

「お出かけですか？」

「ああ、夕方には帰る予定だ」

ゲームを中断し、昨日の夜から用意しておいたリュックを背負う。

「どこに行くんだ？」

ぎるが出かけようとする俺の目的地を尋ねて来る。

「部活動だよ」

そう言い残して、俺は家を出て集合場所へと向かう。

「遅いぞ天王寺」

集合場所はバス停で、俺以外の全員が揃っていた。

「ああ、悪い悪い」

拝むようにお手々のシワとシワを合わせて謝罪する。謝罪と言えるかは分かったものではないが。

「それで？ 瑚太朗君、どこに行くの？」

「ここからそう遠くない場所に廃墟があるから、そこに行こうと思うんだ」

「嫌よめんどくさい」

真っ先に首を横に振ったのは案の定というか朱音だった。

「なんだかんだ言いつつ来てくれる会長萌え」

「はいはい」

軽くスルーされた。結構悲しいだよ。

「瑚太朗。それより行きませんか？」

「そうだな、行くか」

ちはやが肯定的なのが嬉しい。

静流は「一生付いて行きますダンナ」的なノリで首肯してくれる。

かくして、俺達は目的地へと向かうのだった。

途中の道のりについては企業秘密なんで都合によりカット。

って、俺は誰に向かって言ってるんだ？ 前にもこんな事があったような気がする。

「どうしたコタロー。中に入らないのか？」

目的地にたどり着いたは良いが、建物の中に入らない俺を不審に思ったのだろう静流が聞いてくる。

やべ、ボーツとしてた。いや待てよ。ここはあえてボケてみよう。

「俺暗いの苦手」

ボケられませんでした。

「天王寺……お前、オカルト好きの癖に暗いのが苦手なのか？」

「そうなんだよ地球委員長」

「私はいつそんな大規模な委員長になった!？」

以前に言った事を覚えてないのか?——って、覚えてないんだよな。

「意外ね、この前は夜中の学校に来ていたのに」

会長さんや、それは言っちゃいけねえお約束よ。

「小鳥く、ここはお前のPOWERで和ませてくれよ」

「良いけど、どんなのが好み？」

「そうだな、熱い人っぽくお願い」

「OK」

『ゴホンッ!!』と咳ばらいをして――

「怖いってなんだよ？ テメエで勝手に決め付けて言い訳なんかして逃げてるだけじゃねえか!!」

確かに怖いよ。それはオレだって同じだよ。でも、オレとお前とで決定的な違いがあるんだ」

「決定的な……違い？」

「オレは逃げねえ。怖いからって背中を向けて、見て見ぬフリはできないからな」

「けど、そんな綺麗事は――」

「そうだな、できないかもしれない。ただの迷惑で、失敗してしまいうかもしれない。それでもオレは逃げたくないんだ!!」

「そんな事言ったって、俺が怖い事実は変わらないんだ!!」

「だったらやってやるよ。お前の抱いている恐怖という幻想を、このオレが纏めてぶち殺す!!」

ちなみに14巻のみ「ぶち壊す」になっていたりする。

「あのー、終わりました?」

ちはやがオドオドと尋ねてくる。

皆にはイン○ックスごっこは通じなかったようだ。

「よし、中に入るか」

いい加減、皆くたびれてるだろうし。

「しかし、何もねえのな」

期待してなかったけど、ここまで何もないとなると更なる脱力感がある。

「ちょっと上の方を見てくる」

「それなら私も行くよ」

「あたしも」

階段を見付けたので、俺が2階へ行くと言い出すと小鳥とちはやが着いてきた。

持つべきものは友達だ。

ってな訳で、早速2階に上がったのだが別に何もない。

階段を上ってすぐに大広間に出た。

それだけで個別に部屋があるという訳ではない。

「ここで家族全員で寝てたんですかね？」

「それはどうだろう？」

そこまで仲良しとは思えない。部屋の隅に歩を進める。

「どうかしたの？」

「ちょっと待っててくれ」

小鳥に待つように促して、部屋の隅に来るとしゃがみ込む。

かなりの時間が経っているためか黒く変色して分かりづらいが――

これは血だ。

「瑚太朗、これ」

何で血があるかを考えたかったが、ちはやが俺を呼ぶのでそちらに行く。

ちはやも何かを手にとって、こちらへ駆けて来る。

「手紙……か？」

「誰宛てだろう？」

しかし、なんだって手紙が——いや、待て。これは随分と“真新し過ぎないか？”

建物自体がいつ造られたかもわからない程に古い。

それは構わないのだが、一体どうしてこんな手紙があるのか？

「ちょっと見せてくれ」

「はい」

うーん、別に変わったところは——あれ？ 裏に何か書いてある。

『良い記憶を求める者から地球救済ハンターへ』

ドクンッ！！

心音が急激に早まる。

ついに、ついに手に入れた。あいつとの繋がりを持つ物を――

「どうしたの？ 瑚太朗君。危ない犯罪者みたいにニヤニヤしてるよ」

「ああ、悪い悪い」

今、小鳥が何を言ったか分からない位に気分が高揚している。

「さて、行くとするか」

さりげなく手紙をポケットにしまうと階下に降りて、建物を後にする。

この後、しばらく小鳥に「犯罪者予備軍」と言われたのだが……何故だ？

部活動？（後書き）

前に引き続きやっちゃった。

後悔はしていない。

部活動？（前書き）

今回も前置きで遊ぼうとしたけど……止めにしておきます。

いえ、決してめんどくさいからとかじゃないですよ

そしてヴァイスの Rewrite 発売だからデッサン構築を考えてるんじゃないですよ

部活動？

「それじゃ、お願いできますか？」

「OK。このスーパー庭師・小鳥さんに任せなさい！！」

朝の教室に入るなり、ちはやと小鳥が何やら約束事をしていた。

それは良いが小鳥。そこって俺の席なんだが。

「あっ、おはよう瑚太郎君」

「おはようございます瑚太郎」

「おはよう2人共。朝っぱらからガーデニングの話でもしてたのか？」

「良く分かったね瑚太郎君。ひょっとしてエスパーとして覚醒しちゃってる？」

「まあ、そんなところだ」

ってか、一応は超能力者だから間違いじゃないんだよね。^{エスパー}

「さっき小鳥が『庭師』って言ってたからもしかやと思ったただけだな」

「そうなんです。実は家の庭が手入れされてないのを聞いた小鳥が――」

「目を爛々に輝かせた訳か……」

いつだかにも見た事のある光景だな。

「んで？　いつやるんだ？」

「明日が休みだから、明日にでもしようかなって」

「よし、分かった」

これは丁度良い機会かもしれない。

上手くフォローできるかは分からないが、やるだけやってみよう。

「それじゃ、明日の部活動は鳳家のガーデニングだ！！」

言いながら、オカ研メンバー＋吉野にメールを送る。

何で吉野を呼ぶのかって？

そりゃあ、面白い展開になりそうだからさ。

「ああ、そう思った時期が俺にもありましたとさ」

はあく、そうだよ。すっかり忘れていた。

ちはやの家にはスーパー万能執事・咲夜が居るんだった。

一応、この世界ではちはやの家に住んでる事は知らない設定＋ガーディアンメンツと小鳥は初対面なので自己紹介も済ませる。

っで、話を戻す。俺はさ、皆で協力すればガーディアンやらガイアとかに関係なく仲良くなれるって思っていたんよ。

けどさく

「1人でここまでやるかね」

「実際にやっているのだから現実を受け止めなさい」

俺の呆れに律儀に返してくれるのは朱音。

現状を説明していなかったな。

まあ、言わずもがなちはやの家の庭だ。

そしてオカ研メンバー with 咲夜だ。

我等が吉野は前回と同じように帰ってしまった。

っで、これまた前回のように咲夜1人で庭の手入れをしてしまっ

いる訳だ。

踊るように――それこそ尊敬の念を絶やさないTK先生みたいなダンスシングを披露してくれる。

しばらくは行方不明だったが、つい最近に彼に似た姿の男性を見掛けた。

しかし、これでは木を植える時にしか皆で協力できそうにないな。

「お前ら、先に飯の用意しといてくれ」

この分だと昼前には終わりそうだ。

委員長が居るし、味付けは静流がしてくれるから大丈夫だろ。

めっさ生き生きしている咲夜に手間は掛けさせるのは気が引ける。

たまに咲夜の方角から「これが私の全力ではない!!」とか「岡崎サイコー!!」とか聞こえたけど……気のせいだよな？

全員も納得してちはやに案内してもらい、キッチンへと向かう。

「さて――と」

俺としては咲夜には聞きたい事がある。

こっちに来た時も“咲夜が居るのが当たり前だと認識していた。”

けど、もう存在は消滅しちゃったはずなんだ。

こいつが本当に俺の知る鳳咲夜であるかを、リライター書換能力者であるかを確かめたい。

知らなきゃ——ちはやを傷付けるのは嫌だからな。

「よう、咲夜。ちょっと良いか？」

「なんですか？ 与太朗君？」

俺が軽口で咲夜の名前を呼んだ事に疑問を感じず、俺の名前をいつも通りに間違えるのは——咲夜だ。

そこで咲夜は手を止める。

俺の声音に真剣味があった事に気付いたからだろう。

「今ならちはやも他の連中も居ない。腹を割って話せる」

「私にはありませんが」

「俺にはある」

逃がしやしない。

俺には今の咲夜が何者かを知る義務がある。

「お前は——リライター書換能力者か？」

ピタリと、咲夜は動きを止めてしまう。

どうやら当たりのようだ。

「何故——その能力を知っているのです？」
リライター

咲夜は俺を睨んで来る。

まあ、当然の反応だな。

「そりゃあ決まってるよ」

パフォーマンズにしてはコストが大きいかもしれないが……どうせ後に使う必要が出て来るんだ。早いか遅いかだけだ。

ほんの、小指に粉を付ける程度なら支障がない——と思う。

すると、咲夜の顔が驚愕に変わる。

「まさか、瑚太朗君……君は、」

「まあ、察しの通りだ。俺も同じだよ」

「そんなポンポンと使うものじゃありません!!」

「大丈夫だよ。ほんのちよつとだけだから。秒針を動かしたただけだから」

咲夜がこんなにも真摯に言うのは珍しい。

「という事は君はガーディアンですか？」

空気が重くなる。

「ガーディアン？　なんだそりゃ？」

「じゃあ、君は野良の……」

野良とか、なんつう言い草だよ。

俺がガーディアンに入っていない（正確には除籍に近いが）から嘘は言っていない。

「つで？　どうなんだよ？」

「……………そうです。私は書換能力者です」
リライター

「もう一つの質問だ。お前は“どう書き換わった？”」

しかし、咲夜が何かを答える事は全くなかった。

とりあえず、それで察しは付いた。

恐らく咲夜は今回も今までと同じで魔物化したはずだ。

「すまん。変な事を聞いた」

「いえ——大丈夫です」

咲夜だって答えたくないんだろう。

再び咲夜は作業に戻る。

その背中に、俺は語りかけた。多分、期待を胸に膨らませたんだろうな。

「以前に……別の世界で一緒に戦った覚えはないか？」

「ないですね」

今度は速答。やっぱり期待したのが間違いだったか。

「悪かった。んじゃ、皆で昼飯用意して待ってるから」

「分かりました」

聞くべき事は終わった。

あとは、俺が導き出すだけだ。

昼は（主に）ルチアが作った飯だった。

味付けはそれとなく静流がしてくれて、美味しいものが出来上がっていた。

念のために言っておくが激辛料理は何一つとして作られていない。

っで、午後になってガーデンングをし始めた。

「ちー、その丸太はこっちだ」

「ふえええ。す、すいません」

「会長さん。委員長。それ持って来て」

「それってどれの事よ……」

「これじゃないか？」

「頼まれていたものをお持ちしました」

ガーディアン。ガイア関係無しに――分からないからというのもあるんだろうが、それでも皆で手を取り合って一生懸命である。

「あとは篝……お前だけだ」

俺の我が儘かな？

何でも手を伸ばそうとする俺は強欲なのかな？

でもさ、この中にお前が入っちゃいけない道理なんてない。

地球救済ハンターだって男の子なんだ。

「ああ、そうか――」

なんとなく、良い記憶とやらが何なのか――何を示すのか分かってきたよ。

今までは漠然としたものだったけど、今回の確信を持てた。

ちゃんと形となった。

あの時の俺は手遅れだった。あの時の俺も手遅れだった。あの時の俺も同じく手遅れだった。

その時の教訓が活かされてない訳じゃないんだ。

籌。ひょっとしてお前が望んでいたものは――

「今度は寂しい想いはさせねえよ」

小さく、俺は宣言する。

誰にも果たせないというのならば、俺が絶対にやってやる。

理不尽と決められた運命を書き換えてやる。

誰かが居なくなる運命なら書き換えてやる。

友を傷付けるだけの運命は書き換えてやる。

桜が枯れてしまう運命など書き換えてやる。

誰かが悪役になる運命なら書き換えてやる。

友のいなくなる運命なんて書き換えてやる。

大切な人がいなくなるなら書き換えてやる。

そんな世界が訪れる運命なら——俺が世界ごと運命を書き換えてやる。

覚悟なら決めた。

やってやる。やってやるぞ!!

俺がやるんだ。

何かを無くさなきゃならない運命なら、世界なら……この俺が書き換えてや——

「瑚太朗君。手が止まってるよ」

「すみません」

締めりのない主人公でごめんなさい。

森の中で？（前書き）

瑚太郎「瑚太郎と」

小鳥「小鳥さんの」

瑚太郎＆小鳥「仲良しレイディオ」（パチパチパチ）

小鳥「しかし、前は吉野君じゃなかったかい？　もう浮気かい？」

瑚太郎「いや、昨日メールで『来れない』って連絡が来たから」

小鳥「おう！？　吉野君は随分とマメな性格だね」

瑚太郎「うん。ここで面白い内容だったらネタにしようとしたのに残念だよ」

小鳥「瑚太郎君ってばえげつない」

瑚太郎「そんな事はないさ。俺は常に清らかで、美しく、そしてイケメー」

小鳥「はいはい。ワロスワロス」

瑚太郎「小鳥さんが話の腰を折るだけじゃなく、普通に流した——だと！？」

小鳥「幼なじみだからね。言いたい事は分かってるから」

瑚太朗「つまり、小鳥は俺の全てを理解しているんだ。2人はゆくゆく恋人に――」

小鳥「ならないからね」

瑚太朗「ジーザス!!」

小鳥「さて、お腹空いたしご飯を食べようか」

瑚太朗「俺のは軽くスルーですか。まあ良いよ、どっかに食いに行くか」

小鳥「ふふん。実はお弁当を用意したんだよ。小鳥さんのお手製さね。瑚太朗君の分もあるだよ」

瑚太朗「ひゃっほう。小鳥サイコー!! さすがにVenus」

小鳥「んじゃ、そこで食べようか」

瑚太朗「ゴチになります」

吉野「お前ら、本当は付き合ってるだろ」

森の中で？

「——ってな訳だ。どう思う？」

『天王寺君の言う事が本当だとしたら、そこには誰かが住んでいた可能性がなくなもないわ。もしくは未だに誰かが暮らしているか』

今は連休前の金曜の夜中。

あれからまた時間が経ちましたさ。経ちましたとも。

夜中に電話している相手？ 井上だよ。

俺がこの前に見掛けた虹色の泉だか湖だかの話をしてやってる。

まあ、いずれにしろ井上だったら勝手に森に行くと思うから先に手を打たせてもらう他はない。

『興味が沸いたわ。明日は森に行く事にする。そうと決まったら準備しなくっちゃ。それじゃ天王寺君。また月曜日ね』

ツイッターと無情にも切れた通話。

「どうかしたのか？」

「まあ、ちょっと——」

携帯を持ったまま固まってる俺にぎるが問い掛けてくる。

人の話は聞けっの。

まあ、これで井上が明日行く事を知ったから良しとするか。

「この前の部活動で手紙を見付けた時から毎日のようにノートに色々と書いていましたが……今日は良いんですか？」

ぱには目ざといな。だけどここで話す訳にもいかない。

「ああ、もう終わったから」

そう——俺は篝の手紙を貰って以降、そこに書かれた内容をずっと考えていた。

その内容とは『この世界に仇成す者が居る。オカ研メンバーと一緒に見付けて欲しい』と。

ここから推測するに、オカ研メンバーは白だ。

残るはガーディアン、ガイア内の誰か。もしくは新たな登場人物が出て来るのか。

詳細は不明だが、いずれにしろ一筋縄では行くまい。

それよりも明日の事だ。

「明日なんだがな——」

俺は2人に明日の事を説明する。

翌朝。俺はリュックサックを背負って、森の前で井上を待ち構えていた。

「ふぁー、遅かったじゃねえの」

「天王寺君……どうしてここに？」

案の定、井上は口をあんぐりとさせたままこちらを見ている。

「んなの、心配だからに決まってるからだろ」

「とか言って……私の調査を邪魔しようって言うんじゃない……」

「関係ないよ。俺は純粹にお前が心配なだけだ」

「そう。なら邪魔だけはしないでよね」

「分かってるって」

先に歩きはじめた井上の肩を軽く叩いて、俺も横並びに歩く。

「見付からないわね。もうちょっと奥かしら？」

「多分な」

井上の後ろを着いていく。

こうしてるとストーカーみたく見えるけど――気付かないフリしとこう。じゃないと色んな人が草陰から現れて捕まえてきそうだ。

「何か暑いな」

「今日は気温が高いって天気予報で出てたから」

「そういや、昨日は天気予報見る余裕なかったんだよね」

主に急に入った予定をどうこなすのかしか考えずに準備を始めたかならな。

飲み物や緊急時の食料はきちんとあるから平気だろうか。

しかし、それよりも問題は魔物が出た際の対処だ。

俺1人なら別に気にする必要性は皆無なのだが……井上が居るとなると話は変わるぞ。

やっぱし、ここは逃げの一手だな。

「どうしたのよ天王寺君」

「ああ、ちょっとな」

ひよっとしたら、とんでもない事に巻き込まれるかもしれないし、ガーディアンやガイアに目を付けられるかもしれない――が、やっぱし俺は井上は放っておけないんだ。

「とにかく、もっと奥を見ましようか」

「そうだな」

井上の提案に乗っかって、俺も森の奥を目指す。

歩く事、数時間――そして、俺の見覚えのある場所にたどり着く。

「何だかきな臭いわね」

ジャーナリストの勘ってやつか？ 井上は言い当てやがる。

俺だって覚えていなきゃ「怪しい」だなんて思わなかった。

出来れば当たって欲しくないんだが……” そうもいかないんだよな。

「何よ……あいつらは？」

会いたくなかった。遭遇したくなかった。こんな状況で井上を巻き込むだなんて事はしたくなかった——が、現実となった。

使い魔の黒い狼と黒いフードを被った人が列を作って歩いていた。

少し遠くから木の陰に隠れて見ている。

「どうやら賭けは天王寺君の勝ちみた——」

「シッ！！　今はそんな事はどうでもいい」

距離が遠いからと言って、気付かないだなんて言い切れないからな。

「離れよう。スクープかもしれないが命あつての物種だ。それに——
—こんなの信じる奴はほんの一握りだけだ」

「そうね」

井上も同意してくれたようだ。離れようとしたところで——

「どこに行くつもりだ？」

背筋がゾツとする。

この声は確か……保志——ミドウか!?

でもガイアとは縁がないはずなのに——いや、詮索は後だ。

こんな場所で能力を発動されたら、堪ったものじゃない。

「ヤバい。走るぞ!!」

手で引っ張ると走る速度は遅い。

だから、井上をお姫様抱っこして森の中を駆ける。

「て、天王寺君!？」

「喋るな!! 舌噛むぞ!!」

何かを言おうとしたが、俺には構ってる余裕はない。

人の気配はない——が、追っ手がない訳じゃなさそうだ。

黒い狼が左右に2匹ずつ並走している。

くそっ、迎撃するしかねえ。

「井上。ちょっと我慢してくれ」

「え……っ!？」

井上の回答を待たずして、お姫様抱っこからどのようなにしたのかも分からない。気づけば井上をおんぶしていた。

同時に右腕にオーロラブレードを展開する。

背中で井上が息を呑んでいるのが分かった。

恐らく疑問を抱いてるだろうが、残念な事に構ってる暇はない。

「せやっ!!」

黒い狼が2匹並んでるのを良い事にブレードを伸ばす。

1匹の脇腹に刺さるとそのまま貫通して、もう片方にも突き刺さる。

まずは2匹殲滅。砂となって、霧散して消える。

続いて残る黒い狼が襲い掛かってくる。

「直線的過ぎるぞ!!」

足で急ブレーキを掛けると、勢い付いた黒い狼達が目前を通り過ぎ

る。

「らあっ!!」

右腕に展開したブレードで1匹を胴を一刀両断する。

続けざまに、残る1匹の首を切り落とす。

2匹は同時に粒子となって消え失せる。

「助かったの？」

「いや、まだだ」

井上を背負ったまま、俺は森の中を再び駆け抜ける。

次の敵が迫っているから———と思った矢先、それは“下から現れた。”

地面が盛り上がり、木々を根元から引きちぎるかのように倒す。

出て来たのは、形容し難い容姿の存在———化け物だ。しいて言うなら、巨大なザリガニに近いかもしれない。名前はクリボーログ———だったか。

「何よこれは？」

背中の井上が恐怖で頭が埋め尽くされているのが分かる。歯と歯を何度も噛み合わせて、ガチガチと音まで出している。

俺1人なら化物の相手は訳無いけど……井上が居るとなると話は別だ。

背中井上を降ろす。リュックを背負っていたのでおんぶしづらかったよ。

「ばに。井上を頼む」

「分かりました」

俺のリュックからぱにが出て来る。

「え？ え？」

井上はパニックの連続で思考が追いついていないようだ。

「この妖精は味方だ。こいつに協力してもらって、森を脱出するんだ」

「天王寺君は？」

「俺なら心配するな。このデカブツをさっさと潰して、すぐに追い掛けるから」

クリボーイログを見据える。確かに強力な使い魔だが、今の俺には負ける要素はない。

「分かったわ。あとで会いましょう」

「こっちですわ」

ぱにに先導され、井上は森の中を駆けて行く。

「さて、と……」

俺は倒すべき標的へと鋭い視線を向ける。

クリボーログが右のハサミを振るって来る。

森の中であるが故に、木々が邪魔をしてくる訳なのだが……それさえも全て薙ぎ倒している。

「くそつたれ!!」

木の陰に隠れながら、クリボーログの猛攻を避ける。しかし、それもいつまでも続くはずはない。

クリボーログがハサミを振るう度に周囲の木々が薙ぎ倒されている訳で、隠れる場所が無くなっているのだ。

「これだけじゃ……足りないか」

ただアクセルを踏むのは得策じゃない。篝のオーロラを展開するのを止めた。ブレードではあの装甲は碎けない。狙うは脆さがある隙間のみ。しかし、どこにあるんだか――。

「うおいつ!?!」

ハサミで俺を串刺しにしようと突きを放って来る。俺は強化した脚力で上空へジャンプする。

だが、それよりも早くにクリボーログがハサミを広げて、それで俺

の胴体をちょん切ろうとしていた。

「ヤバいつて!!」

右腕にブレードを展開。大きさよりも長さを優先だ。

それを下へ向けて――地面に突き刺さっても伸びる事を止めない。
必然的に俺の身体は宙へ。ハサミは一瞬遅れて、その役目を真っ当
してオーロラブレードを切ったのだ。

「うおっ!？」

宙では身動きが取れない。足から着地するように落下しているが、
クリボーログはそんな状況の俺に狙いを定めてハサミを振るって来
る。

「クソッ!!」

幸いにして、ハサミは右の片方のみだ。これならば何とかなる。

当たる直前に左足でハサミを蹴った。空中で踏ん張りが全く利かな
いが、それでも十分だった。

俺の身体はクリボーログから距離を取る形で離れ、地面に何事もな
く着地した。地面に足が着けばこっちにも分がある。

「うおおおおおっ!!」

咆哮を上げながら、俺はクリボーログから見て右側にダッシュする。

その際にオーロラを発現する。あの装甲を打ち砕く位の威力のものが
必要だ。俺が思い至ったのは両手持ちの『剣』だ。

クリボーログが右のハサミを振り下ろして来る。紙一重で俺は身体
をズラす事で回避する。

そして懷に一気に飛び込む。

クリボーログはかなりの巨体故に一度内側に潜り込めば攻撃される
事は少ない。

膝を曲げて、身体のパネを利用して真上に跳躍する。クリボーログ
に乗っかり、脳天に近いだろう装甲の部位に隙間があるのを発見し
た。

さっき高く跳び上がった際に遠目から確認できていたが……まさか
ビンゴだったとはな。

「これで——終いだ!!」

隙間に向けてオーロラの剣を突き立てる。

悲鳴にならない悲鳴と共に、クリボーログは暴れ出す。

「ぐうつ、わあっ!？」

暴れた拍子に俺は振り落とされてしまう。すぐに迎撃に備えて地面
に着地するや、クリボーログへと振り返る——が、

「居ない……」

消えた? 違う。地面に先程までなかった穴がある。逃げたか。

深追いは禁物だな。井上の方が心配だ。

「ぎる。ぱにの気配を辿ってくれよ」

「あいよ」

リュックからぎるが顔を出して来る。

ぎるとぱには互いに繋がっている。それを利用して、俺は井上にぱにを付けたのだ。

「急ぐぞ」

クリボーログはまだ生きている。早く井上を見付けなければ取り返しのつかない事になる。

森の中で？（前書き）

前話の『クリボーログ』が『グリボーログ』になってました。修正しました。

疲れてるせいか、今回はサラッと流した感じです

森の中で？

「居た。こっちだ！！」

「井上！！　　ぱに！！」

ぎるを肩に寄せ、俺が全力で森の中を駆ける。その甲斐あって、井上に追い付く事ができた。

「瑚太朗さん。早かったですね」

「お前らを2人だけにするには森は危ないからな」

尤も、見付けた代償に俺はかなりの体力を消耗する羽目になったが。

「こっちは黒い狼なんかを追われて大変だったのよ」

井上がいつものように、軽い口調で言う。しかしながら普段のキレはなく、不安げな様子が垣間見えた。

森の中でこれだけの非日常を目の当たりにし、普段通りでいるなんて難しい。

「とにかく、まずは休もう」

「休めそうな大木を見付けました。そこに行きましょう」

ぱにが俺達を先導してゆっくり飛行する。

ぱにが案内した先には大木の根本が浮き上がっており、自然の中でテントができあがっていた。

ぱにが先に入り、俺と井上とぎるが続いて入る。

「ふう、疲れた」

人が2人入っても大丈夫な程に広い。まるで俺達の為に作られたものみたいだ。

「時間は――夜中7時ね」

連絡はできないと知りつつも、時間を知りたいが為に井上は携帯を取り出す。

「じゃあ、今日はここで休もうぜ。俺も疲れちゃった」

「そうね。まずは何かを食べましょう」

俺も井上もリュックを降ろし、中身を確認する。

「適当に食べる訳にもいかないから――これだけかな」

取り出したのはカロリーメイト。

「井上のは念のために取っておこう」

「懸命な判断ね。今日は食べて、ゆっくり寝ましょう」

井上も随分と慣れたものだ。ジャーナリストをやっていると慣れるものなのか？

まあ、良いか。俺達はカロリーメイトを食べて寝る事にした。

翌朝——携帯で時刻を確認する。俺にしては早いな。6時だ。

「おはようございます。瑚太朗さん」

ボソボソと、小さな音量でぱにが朝の挨拶を交わしてくれる。

井上とぎるは眠っている。2人を起こさない配慮だろう。

「おはよう。悪いな、ひょっとして見張ってくれてたのか？」

「いえいえ、寝ていながらも見張りを続けてくれた瑚太朗さんに比べたら——」

「気付いてた？」

「はい。何となくですけど」

ぱには随分と目敏いな。

「気をつけて下さいね。私達の中で戦う術を持っているのは瑚太朗さんだけですから」

「ああ、気をつけるさ」

身体の成長が止まる前の記憶も引き継いでるからな。傭兵時代の経験を引き張り出すだけで助かるよ。

「うう……天王寺君？」

目を擦りながら井上が目を覚ます。

「まだ6時だ。疲れてるなら寝ていた方が良い」

「うん……なら、そうさせてもらおうかしら」

井上は再び眠りの世界へ落ちていく。

「しかし、不思議ですわね。私達に気付くと思っていたのですが……」

「そうだな——」

クリボーログがその気になれば俺達を見付けるのも容易い気がしたのだが……俺には何となくだけど理由が分かる。

ここは彼女の——簪の縄張りだ。ひょっとしたら簪が助けてくれたのかもしれない。

「それよりも朝飯の用意だ」

正確には朝に口にする物を考える事だ。

まあ、朝飯って考えるのが自然だし、何より気持ちの問題だ。

簡単に食べれるものを口にほお張って、森からの脱出に取り掛かる。

しかし、見渡す限り大地——じゃなくて、木が広がっている。

道がある訳でもなく、キツイ山道が続くばかりだ。道なき道を歩く——という詩に出て来る一節が思い浮かぶ。

「険しいわね」

「まあ、分かつちやいた事だけど……」

クリボーログもあれから襲い掛かる様子はない。むしろ気配を感じやしない。

井上も居る以上は襲い掛かれても困る訳だが。

「こっちですわ」

「こっちだぜ!!」

ぎるとばにが同時に指差す先は同じだった。

「ん? あれって……」

井上が目を凝らしながら遠くを見ている。

「街……だぜ」

「嘘でしょ?」

ぎるが言った事は井上には到底信じられなかったようだ。

かく言う俺も遠くに映るものが町並みである事は判断が着くのだが
……

「行くだけ行ってみるか?」

「そうね。何か情報があるなら欲しいものね。それにその妖精さん達の見解だとあそこは通らなくちゃいけないみたいだもの」

恐らくあそこは十中八九ガイアの持ち物だろう。

いつの間にか圧縮空間に足を踏み入れてたようだが……裏を返せば
帰れるチャンスがある。

理想としてはちはやだが、朱音にでも会えば誤魔化しようはある。

他の奴だつたらとんでもない事になるが……ええい!! ままよ!!

俺達は遠くに見える街に針路を決定した。

森の中で？（前書き）

随分と更新するのに時間掛かった上に短い……。

最近ハシャナに嵌まつてるこの頃。誰かヴァイスのハシャナのSPを俺に出してくれ。あとTDのホロも欲しい。

森の中で？

「風祭市にそっくりね」

「そうだな」

井上が物珍しそうに裏の風祭市を見回す。

「人が居る様子もないし……妙ね」

ジャーナリストとやらの勘ってやつか？ まあ、こんな状況なら誰でも怪しむか。

「集団で外出って訳じゃないでしょうしね。これはきな臭いわ」

「けど、何の為にこんなもんを作ったんだ？」

「そうですね。風祭市に似せて作るなんて――」

ぎるとばにが互いに思った疑問を口に出す。

「風祭市に似せて作る必要があったからじゃないかしら？」

顎に手を当てて、井上は自分の中で組み立てたロジックを形成する。
「どうやら“この偽の風祭市がある目的”に気付いたようだ。」

「どういう事ですか？」

「あくまで仮説だけど……風祭市の人間がここに移動してきても不

自由がないように――とか？」

井上の仮説は見事なまでに正解だ。けれど、情報が少ないから確信に至れないだけ。

「有り得るな。オカルトなら『恐怖の大王』なんかを恐れてシェルトー作るとか仕出かしそうだ」

「全く……オカルトとかを信じすぎだっけの」

井上は呆れた様子で灰色の天を見上げる。

「でも、ここまで清々しいまでに非現実的な事が起こると認めざるを得ないのよね」

今まで認めたくなかったものを認めざる事ができない状況に苦笑する。

悪いな井上。あとで埋め合わせしてやるから。

偽風祭市の探索は約2時間程で終了した。広さは風祭市と変わらない。ただ、風祭市と同じ広さがあるだけで、それ以上は壁に阻まれている。

本格的にガイアの根城に飛び込んでいるのを実感させられる。

本当は嫌だが……朱音に連絡を取ってみるか？

携帯を取り出しかけたが、それは思い止まる。

「瑚太朗さん。誰か来ますわ」

「多分、魔物使いだぜ」

ぱにとぎるが俺達にそう呼び掛ける。

「隠れるしかねえか」

幸いにも勝手知ったる町並みだ。門のある塀の高い適当な家の敷地に入る（無論、門を乗り越えた）と身を潜める。

「来たぜ」

ぎるが言うと、指を唇に手を当てる。静かに——と想いを込めて言う。

門の隙間からギリギリに外の様子を伺う。幸いにも俺達から死角になる位置から黒いローブの人達が列を作って過ぎ去って行く。

これは——朱音信者の列か？ 何にせよ、クリボーログを含めてミドウ達が手を出して来ないだろう。

これはラッキーだ……と言いたところだが、残念な事にそうも言い切れない。

だって、ここから出られなければ意味がない。

「井上……」

「なんとなく言いたい事は想像が付くわ。あの人達を追い掛けるんでしょ？」

さすがに分かっていらっしゃる。これもジャーナリストの勘ってやつか？

俺達は小声でこの後の展開を話し合い、列が見えなくなった頃に速歩きで追い掛ける。

気付かれない為に慎重に、忍び足で近付く。

俺は随分と手慣れたもので、井上に小声で指示を出しながら進む。

「一向に着く気配がないわね」

「そうだな」

ひょっとしてバレたか？ いや、気付かれてはいないはずだ。

「天王寺君、あれ」

俺達はいつもなら人でごった返すビル付近に居た。

井上が指差す先には本来ならばないはずの電光掲示板があった。

そこに映し出されたのはローブ姿の人物。あの人は誰だ？

「ヤバい予感がする。行くぞ井上」

「えっ！？ 天王寺君？」

井上が何やら言おうとした矢先だった。俺の悪い予感は的中する。

『この街にネズミが紛れ込んでいるわ。それを見付け次第――消しなさい』

その言葉が耳に届いた瞬間、俺は井上の手を引っ張って走り出した。

命懸けの鬼ごっこが始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8148u/>

Rewrite ～if～

2011年11月14日21時09分発行